

傾城の美姫「エリーザ・リンチ夫人」小伝

中 川 和 彦

一 はしがき

本稿は南米、パラグアイの一九世紀中頃の独裁者の事実上の夫人で、美貌をうたわれた「エリーザ・リンチ」夫人の生涯を素描しようとするものである。

このエリーザ・リンチという女性の名を耳にするのは初めてという人は多いであろう。私自身、この名を初めて知ったのは、まだ大学院の学生だった時である。その頃、時々、「ラテン・アメリカ協会」の理事長であった井澤實先生を訪ねて、教えを受けていた¹⁾。井澤先生は、外務省に長らく勤務され、スペイン、ラテンアメリカ諸国の事情について御造詣深く、その地域を専攻する学者が育ちつついる頃で、先生は、当時、駒場で「ラテンアメリカ学」の講義を担当されておられたようである。私は法学部の出身、大学院も法律専攻で、法学ではドイツ、フランス、英米が主流であった。しかも、私はラテンアメリカに関連する講座を聴講する機会なく、私が関心を向け始めていたラテンアメリカ法研究は暗中模索の状況にあった。したがって、井澤先生の一言一句は、当時の私にとって干天の慈雨であった。先生は歴史に詳しく、また蔵書家で、現地の出版事情、書店の情報にも通じておられ、私は、ラ

テンアメリカの研究に必要な書籍、資料について教えられることが多かった。そういう会話のなかで、ある日、先生から「エリーザ・リンチ」夫人の話しを聞かされた。椿姫のような境遇から、パラグアイの大統領というより独裁者の愛人、事実上の夫人となり、一時は栄華を極めるが、「夫」の死とともにすべてを失い、パリで客死するという、数奇な生涯を遂げられた方で、その人の伝記はパラグアイ、またアルゼンチンに行けば、入手できる、という。帰宅後、手許にあった田中耕太郎先生の『ラテン・アメリカ史概説』を繙くと、リンチ夫人に関連して、「夫」に影響力あり、無謀な「三国戦争」(「三国同盟戦争」)を起こさせた、という趣旨の記述があった。⁽²⁾しかし、このリンチ夫人の出自、人柄については触れておられない。その時はそれだけで、法律学の展開とはほとんど関係がないようであり、また、ラテンアメリカの歴史に関する概説的な書物の記述にリンチ夫人が登場することは稀で、⁽³⁾頭の片隅に記憶が残っていたにせよ、それ以上深入りすることなく、夫人のことは私の主要な関心事ではなくなっていた。しかし、十余年ほど前、資料収集のため、ラテンアメリカ諸国を一巡する旅の途次、初めてパラグアイに足を延ばした。その数年前に制定された民商二法統一法典の実態を見ることが主たる目的であつた。⁽⁴⁾その時、パラグアイの首都アスンシオンの書店でリンチ夫人、また、夫?のソラーノ・ロペスの伝記が多く店頭にあるのを見かける。それまで、アルゼンチンに何度も訪れ、歴史ものも含め、かなり書籍を涉獵していたが、この出会いは初めてであつた。数冊求め、一読し、あらためて関心が高まつた。彼女は、一時、女王のごとく君臨したが、「夫」の死後、国外に追放され、パリで貧困のなかで亡くなったという。書物のなかには、落魄して亡くなった夫人を貶す、死者にむち打つような内容の記述を含むものもあつた。ところが、一九三〇年代のチャコ戦争で、愛国心が盛り上がる趨勢の中で、「夫」ソラーノ・ロペスの名譽が回復され、パラグアイの首都アスンシオンの中心部にある国家英雄顕彰宮に祭られる。次いで、一九五〇年頃から血縁者などの努力もあり、夫人の「夫」への献身ぶりが評価され、

逝去から七五年の後、夫人の遺骸（遺灰？）がパリの墓地からアスンシオンに移送され、名譽を回復していることを知り、美女の栄枯盛衰の生涯、さらに、名譽回復の事情、その背景にあった世論の推移に好奇心をそそられた。それから、リンチ夫人に関する文献を渉獵し始めたが、利用できる図書館にほとんど所蔵されてない。旅先の海外の古書店に立寄る際、また、最近はやインターネットでも探しているが、入手は容易ではない。努力しているにもかかわらず、期待する程には集まらない。現在まで参照できた資料は僅かである。しかし、与えられたこの機会に、リンチ夫人の生涯を跡付けようと思う。まず、手許にあるリンチ夫人、「夫」のソラーノ・ロペスの伝記、三国同盟戦争に関連する文献を、次に掲げよう。もっとも、これらの書物を通覧すると、玉石混交で、中には、悪い意味での大衆小説のようなものもある。ヨーロッパの人たちにとり、一九世紀半ば、余り知られていない辺境のパラグアイに赴いたアイルランド出身の美女と野獣のような独裁者とのラブロマンスは大衆を引き付ける格好のストーリーであるのかも知れない。

Hector Florencio Valera, *Elisa Lynch, por Orion (pseud.)*, 1870, Buenos Aires (Imprenta de la Tribuna). (上智大学イベロアメリカ研究所の御好意による)

Henry Lyon Young, *Eliza Lynch. Regent of Paraguay*, 1966, London (Anthony Blond).

Alyn Brodsky, *Madame Lynch and Friend. The true account of an Irish adventuress and the dictator of Paraguay who destroyed that American nation*. 1975, London (Harper & Row).

Graham Shelby, *Madame Lynch. El fuego de una vida*. 1992, Buenos Aires (Editorial Sudamericana) (Título del original en inglés: Demand the world, Traducción de Elviro E. Gandolfo).

Sian Rees, *The Shadows of Elisa Lynch. How a nineteenth-century Irish courtesan became the most powerful woman in Paraguay*, 2003, London (Headline Book Publishing).

Lily Tuck, *The News from Paraguay: A Novel*, 2004, New York (Harper Collins)

Arturo Bray, *Solano López. Soldado de la Gloria y del Infortunio*, 3a. Edición, 1984, Asunción (Carlos Schumann).

Harris Gaylord Warren with the assistance of Katherine F. Warren, *Paraguay and the Triple Alliance. The Postwar Decade, 1869–1878*, Austin (Institute of Latin American Studies, The University of Texas at Austin).

Harris Gaylord Warren with the assistance of Katharine F. Warren, *Rebirth of the Paraguayan Republic. The First Colorado Era, 1878–1904*, 1985, Pittsburgh (University of Pittsburgh Press).

(1) 井澤先生の単独の御著書は少ない。歴史関係では、左記がある。

井沢実『大航海時代夜話』一九七七年、岩波書店。

巻末の増田義郎教授執筆の解説に、学者としての井澤先生の人となりで紹介されている。

(2) 田中耕太郎『ラテン・アメリカ史概説』下巻（昭和二十四年、岩波書店）、一〇七ページ。

(3) 代表的な概説書である。左記も、田中耕太郎先生の記述と同じ程度である。

井沢実・泉靖一・中屋健一監修『ラテン・アメリカの歴史』（昭和三十九年、ラテン・アメリカ協会）三三三ページ以下。

スタンダードな、ラテンアメリカ史の左記の概説は、三国戦争の箇所でもリンチ夫人に全く触れていない。

A. Curtis Wilgus & Raul Decca, *Latin American History*, 5th edition, 1963, p. 312 et seq.

しかし、普及する左記の概説は、リンチ夫人に言及するが、田中耕太郎先生の記述とはほぼ同じである。

Hubert Herring, *A History of Latin America from the Beginnings to the Present*, 2nd edition, enlarged, 1964, New York (Alfred A. Knopf), p. 713 et seq.

(4) 中川和彦稿「パラグアイ国一九八五年市民法典の成立」『成城法字』二七号(昭和六三年三月)五五ページ以下を参照。なお、この小論の執筆当時、筆者はまだ同国を訪れていなかった。

二 パラグアイという国

リンチ夫人が生活し、第二の祖国となったパラグアイ国を最初に紹介しておこう。近時、サッカーが盛んになり、パラグアイ国出身の選手の活躍があるためもあって、その国の名前は知られるようになっていく。しかし、パラグアイ国の正確な場所、位置は、近くのウルグアイと混同されがちで、海に面しているのは、どちらの国か、正しく指摘できる人は多くないであろう。パラグアイは、ボリビア、ブラジル、およびアルゼンチンの三方国に取り囲まれた、内陸国で、南アメリカの心臓のような場所を占める。ウルグアイには、直接国境を接していない。その面積は、そんなに広くなく、凡そ四〇万平方キロ、わが国の一、一倍しかない。人口は、近時、六〇〇万をやつと超えたくらい。住民の九〇%以上は先住していたグアラニ族とスペイン人の混血と言われ、スペイン語とグアラニ語が国語である(憲法にその趣旨の規定がある)⁽¹⁾。主要産業は農牧林業で、輸出総額の約半分を占める(特に、大豆の輸出額は世界第四位)。地下の鉱物資源はなく、一人当たりの国民所得(GNI)はやつと一、〇〇〇ドルを超えたくらいで、ラテンアメリカ諸国の間でも豊かな方の国ではない⁽²⁾。

パラグアイの首都アスンシオンは人口六〇万、緑の多い街である。パラグアイ河に面し、港の機能も持つ。しかし、街のたたずまいは、ラテンアメリカの大都市のそれと比べれば、地方の中規模の都市の感じで、私が訪れた頃、街の中心部においてすら、交差点に交通信号はなく、警官が交通整理にあたっていた。市内電車の路線が幾

つかあったが、電車の車両の、破損した窓ガラスをベニヤ板で修復していた。鉄道の駅があり（南米で早く、鉄道路線が建設された）、駅を訪れると、燃料のマキが入荷しないため、当分の間運行休止の掲示があった。イギリスで出版された旅行案内の『サウス・アメリカン・ハンドブック』の記述に書店が紹介されていた。ところが、その所番地に書店らしき店舗が見当たらない。警官に訊ねると、すぐ近くの公園敷地内のテント張りの仮？ 店舗を指された。そこが、首都アスンシオンの代表的な書店であった。展示されている書籍を眺めると、パラグアイ現地で印刷、刊行されたものはほとんどない。多くは、アルゼンチンからの輸入である。もう一つ気付いたことは、外国語の辞典が西英、西仏に劣らず、西独も多いことで、この国への、ドイツからの移住者の社会というが、層の重みを感じさせた。余談であるが、ドイツの哲学者ニーチエの妹エリザベスが一八八七年、同志一四家族とパラグアイに移住している。もっとも、現地の自然に順応できず、エリザベスは数年で、ドイツに帰り、兄の介護、かつ兄の著作の整理に当たるが、移住したドイツ人コロニーは存続している、という。⁽³⁾ 日本からの移住者は多くなく、企業から派遣の一時滞在者も含め、日本人、日系市民は一万程度と言われる。これに対し、韓国系の移住者は三万とも一〇万とも言われ、目立つ存在となっている。⁽⁴⁾

文化的には、言語が共通、また、交通の利便もあって、アルゼンチンの影響が強いようで、法律面では、民法、商法は、アルゼンチンの法典が、文字通りそのまま、長く施行されていたことがある。もっとも、一九八五年市民法典は、少なくともその構成について、ブラジル法の影響を受けている。⁽⁵⁾

パラグアイには目立つ観光資源が少ない。前述の『サウス・アメリカン・ハンドブック』では、パラグアイで見べきものとして、首都アスンシオンの他に、イタイプの水力発電所、ミシオンのイエズス会の布教所の跡、そして、チャコ地方が挙げられているが、その国に特別の関心のある人ならともかく、一般の観光客を惹き付けるほど

の魅力はない。近隣のブラジル、アルゼンチン、ボリビアなどの諸国の観光名所と比べると、かなり見劣りする。そのせいもあってか、観光客が少ない。そして、その国へのアクセスが容易ではない。パラグアイへの民間航空の直航便を運行しているのはアメリカの航空会社のみで、ヨーロッパからの乗入れはない。無論、日本からは、近隣国から乗継ぎで入国するしかない。私は、往路、ブエノスアイレスからローカル線で、帰路は、サンパウロ行ききの飛行機に便乗した。そういう事情もあってか、日本への郵便も日数がかかる。五キロの書籍小包を六個準備し、差し出すため、アスンシオンの郵便局に赴いたところ、係員から、書籍は航空貨物で送付する方が廉価である、と奨められ、裏の局員の休憩室のような部屋で、段ボールの箱を貰い、手伝ってもらって、小包を解体し、三〇キロ近くの書籍を一箱にまとめ、発送したの思い出す。パラグアイの人々は、このようにすぐれて親切というか、従順である。ここに私の体験を記したのは、パラグアイの人々のおおらかな国民性を理解していただくためである。

(1) 例えば、一九六七年憲法の第七条にその趣旨の規定がある。しかし、公用語はスペイン語である。Marras Otero, *Las Constituciones del Paraguay*, 1978, Madrid (Ediciones Cultura Hispánica del Centro Iberoamericano de Cooperación), p. 213.

(2) パラグアイについて、左記を参照されたい。

外務省『パラグアイ共和国(各国・地域情勢)』(二〇〇五年一月現在) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/paraguay/data.html>

『ラテン・アメリカ事典 一九八九年版』平成元年、ラテン・アメリカ協会、九五〇ページ以下。

Ben Box (ed.), *Foot Print South American Handbook 2006*, 82nd edition, 2005, Bath, UK (Footprint Handbooks Ltd), p. 1193 et seq.,

George Pendle, *Paraguay. A riverside nation*, 2nd edition, 1956, London (Royal Institute of International Affairs).

Riordan Roett and Richard Scott Sacks, *Paraguay. The Personalist Legacy*, 1991, Boulder (Westview Press). (成城大学図

書館所蔵)

Parguay, in [The New Encyclopedia Britannica, Volume 25, 15th edition, 1988], p. 421 et seq.

Library of Congress, A Country Studies: Paraguay. <http://www.lew62.loc.gov/frd/cs/pytoc.html>

The World Fact Book: Paraguay. <http://www.odci.gov/cia/publications/factbook/geos/pah.html>

- (3) Elisabeth Forster – Nietzsche, From Wikipedia, the free encyclopedia.
U. S. Department of State, Background Note: Paraguay (December 2005). <http://www.state.gov/r/pavei/bgn/1841.html>

<http://en.wikipedia.org>

左記も参照。

ベン・マッキンタイヤー（藤川芳郎訳）『エリーザベト・ニーチェ ニーチェをナチに売渡した女』一九九四年、白水社。

なお、ジャーナリストである、この本の著者はパラグアイおよびアスンシオンを紹介するにあたり、ソラーノおよびリンチ夫人に触れているが、その叙述は一方的で、誹謗に近いように思える。この著者がリンチ夫人の生涯について参照している文献は、敵意ある内容と批判をわれているものもある。Nickson, *op. cit.*, p. 356.

- (4) Pico Iyers, *Falling off the map: Paraguay 1992*, <http://www.Pyadopl.org/articles/FallingOffTheMap.txt.html>

- (5) 中川、前掲論文、五八ページ以下参照。パラグアイは、独立後、一八四三年の「司法暫定法」で、スペイン統治時代の諸法令を存続させ、その一環として、四六年、スペインの一八二九年商法典を採用したが、一八七〇年、アルゼンチンの一八六二年法典を、パラグアイの第二次の商法典として採用、アルゼンチンが一八八九年に新商法典を制定すると、一八九一年にパラグアイはそれを文字どおりに採用する。民法典については、一八六七年法で、アルゼンチンの一八六九年民法典（いわゆるヴェレス、サルスフェイエルド法典）を採用している。その後、細かい改正を受けていたもの、これが市民法典の制定までの状況であった。詳細は左記を参照されたい。

Juan José Soler, *Introducción al Derecho Paraguayo*, 1954, Madrid (Ediciones Cultura Hispánica), p. 282 y sgr.

- (6) Box, *op. cit.*, p.1195.

三 リンチ夫人の生い立ち

エリーザ・リンチ夫人は庶民の出身であり、彼女の生い立ちについての公式の記録は乏しい。夫人の生涯の大方の記述は、夫人が一八七五年にブエノスアイレスで、自分の立場を正当化するために公表した『異議申立て書』⁽¹⁾に、ほぼ、依拠している。それによれば、夫人は一八三三年六月三日、アイルランド南部の Cooke (Cook) で生まれた。その前年、わが国では大塩平八郎が蜂起しており、その翌年、蛮社の獄があった頃である。父は John Lynch、母は Adelaide Schmock である。リンチ夫人の上に、兄二人、姉が一人いたが、三人ともかなり年上で、兄二人は海軍に入っており、姉はフランス人と結婚し、パリに居住していた。そのため、リンチ夫人は事実上、一人っ子の状態であった。父親は医師で、まずまずの生活であったようで、リンチ夫人も、相当に良い教育を受けていたようである。リンチ夫人はエリーザ・アリシア・リンチ (Eliza Alicia Lynch) と名のついている。一度正式に結婚した夫カットルファージュの姓は、別居後、原則として使用せず、マダム・リンチと称していた。リンチはメイドウン・ネームである。また、エリーザはエリザベスの略称であり、洗礼名はエリザベスだったのでないか、という説もある。ともあれ、本稿では、彼女を指称するのに、場合により、エリーザあるいはリンチ夫人を用いる。

リンチという姓はアイルランドでは珍しくない。夫人によると、父方の先祖を遡れば、司教(複数)がいたし、母方の血縁者には治安判事 (Magistrate)、海軍の高級士官もいたという。ともかく、夫人の父親は土地を持たない紳士で、楽天的な人柄であったようである。すぐれて豊かではないけれども、ほどほどの暮らしであったところ、一八四五年、アイルランドの人々が主食にしていたジャガイモに胴枯れ病が発生し、四六年と四八年にジャガイモがほとんど全滅する。いわゆる「アイルランド飢饉」である。イギリス政府の救援対策が不十分で、当時のアイル

ランドの人口八〇〇万のうち一〇〇万が飢餓などにより死亡した、とも言われている。そして、この飢餓に耐えかねて海外に移住した者は八〇万から一〇〇万に達したとい²⁾う。

リンチ一家も、海外に移住を余儀なくされる。コークの街の商店は食料品を売りつくし、救援委員会の事務所も、配給する食料がなくなり、閉鎖される。リンチ家では、使用人はとくにいなくなり、庭の木の根を掘って、スープにする状況であった。座して餓死するより、とパリの娘の誘いを受けて、金を工面し、リンチ一家三人は、海路、フランスに向かった。エリーザが一〇歳の年である。この幼い時の窮乏、飢餓の体験、特に、コークを出立する時の波止場の混乱、凄惨な光景の恐怖(無賃で乗船しようとする難民が突き落とされる)がエリーザの心の大きな傷、トラウマとなる。³⁾しかし、パリに落ちついた一家の生活は期待したようなものではなかった。その頃、フランスも含め、西ヨーロッパの政情は不安定であった。一八四八年二月、マルクス・エンゲルスの「共産党宣言」が発表され、フランスでは、ルイフィリップが亡命、第二共和政が成立(二月革命)、一八五二年、ナポレオン三世が即位し、第二帝政が成立する。そういう変革の流れにあつて、父親は資産運用の才覚なく、携えた資金の投資は成功しない。頼りにする娘婿は音楽家であり、決して高収入ではない。その頃のエリーザの日常は明白ではない。学校に在籍した記録はないが、貧しいなかで、勉学(特にフランス語、音楽の稽古(ピアノ))に励んでいたようである。⁴⁾

こうした生活のなかで、一四歳になったエリーザは結婚を決意する。相手は、父親といつてもいいような年齢のカットルファージュ(Quatrejages)⁵⁾で、フランス陸軍の騎兵隊に勤務する獣医であった。エリーザの決心は固い。両親も娘の遺志を尊重する。持参金なしで、娘と結婚してくれる相手に安堵すると同時に、娘の養育から解放されるからであった。エリーザは美人に成長している。背丈もあり、実際の年より年嵩にみえた。そして、一八五〇年六月三日、イギリス帰り、国教会で挙式する。⁶⁾エリーザ一五歳である。

この結婚は、エリーザにとり愛のためではなく、貧しさからの解放、逃れであった。エリーザは、夫に従って、任地のアルジェリアの駐屯地で生活を始める。しかし、この生活はパリの華やかな日常に馴染んでいたエリーザにとり堪え難い倦怠の日々であった。しかし、エリーザは、駐屯地の同僚士官の妻たちとの退屈な交際に二年間耐えた。そして、我慢しきれなくなり、パリに帰る。エリーザは、アルジェリアの風土に馴染めず、健康を害してパリに帰った、と、自伝的な『異議申立て書』に記している。その時、エリーザは一八歳⁽⁷⁾。

ところが、婚家を飛び出したエリーザに帰る家はなかった。アルジェリアにいる間に、父親は亡くなっており、母親はアイルランドに帰国。音楽家と結婚していた姉は、夫について地方に転居している。今さら、アルジェリアの夫のもとに帰れず、エリーザに残された道は二つしかなかった。一つは、母親を追って、イギリス、アイルランドへの帰国。それは、窮乏の生活を意味し、過去の飢餓の記憶が蘇り、その道をとつてい選択でない。今一つの残された道は、パリに残ることであった。しかし、頼るべき家族はいない。相談を持ちかける親友も、知人もいない。当時、若い女性にとり、生活の糧をうることはなみ大抵のことではなかった。そして、エリーザにあるのは、その若さと美貌のみである。しかし、エリーザは遺志の強い女性であった。一旦決心すると、彼女は「愛」を捨てる。彼女は男性を「幸せ」にすることが出来ないし、また、彼女を「幸せ」にしてくれる男性と出会えることもないであろう、とエリーザは、その年齢で自分に悟らせようとしたようである。そして、富、権力、独立の三つを目標とし、目標到達の手段として、自分自身を利用する。しかし、身売ることは彼女にとり忌むべきことであった。そして、今様の言葉で言えば、援助交際の相手を求める。それは、フランスにおいてではなく、外国人、しかも、永久的の保護者でなければならなかった。私はパリの夜といつか闇の世界の事情をよく知らない。ただ、デュマ(子)の『椿姫』(一八四八年)のモデルが一八四〇年代の中頃、パリの社交界に浮き名をながしていたマリー・デュブ

レシがモデルであることは承知して⁽⁹⁾おり、エリーザも、そのような巷の風評をある程度見聞きしていた、と思われる。

こういう心境に至ったエリーザは、パラグアイの大使の資格でパリに来たフランシスコ・ロサーノ・ロベスと出会う。二人の出会いの場面について、いろいろ書かれている。それは、大衆小説にまかせ、ロサーノは、エリーザを見て、一目惚れする。それから、プレゼント攻めで、彼女の「愛」を射止め、エリーザはロサーノの「求愛」を受け入れる。ロサーノは決して好男子ではなかった。当時、ロサーノに面識のあった人によれば、グアラニとの混血で、アフリカ系の特色も外貌にあつたという。背丈はエリーザの方は高かつたようである。二人の取り合わせを美女と野獣にたとえる記述もある。ともかく、二人は「新婚旅行」？に出かける。スペイン、ローマ、さらに、クリミアの戦場にまで足を延ばす。やがて、ロサーノの帰国の時が来る。彼はエリーザに同行を懇請する。彼女にとり、パラグアイは未知の国である。その頃、その隣国ブラジルはポルトガルの王室の皇帝の下での帝政であり、ある程度知られていた。エリーザは、ロサーノの蕩尽に近い金遣い、大言壮語のような自信、そして、比較的知られていたブラジルの豊かさの噂から、パラグアイの国情を推測し、ロサーノとの生活に自分の運命を賭けたのである。二人は一八五四年一月一日、ポルトドーでパラグアイの軍艦に乗り込み、パラグアイに向かう。エリーザはその時妊娠している。⁽¹⁰⁾ロサーノが、パラグアイの近代化のために雇傭した技術者、専門家（「お雇い外人」）の一行も乗艦する。エリーザは、その間の事情を、「私は夫と別居してから間もなく、ロベス元帥と出会い、すぐその後、一八五四年にブエノスアイレスに居た」と、『異議申立て書』に記している。⁽¹¹⁾一八五四年は、日米和親条約が締結された年であり、またパリの世界万国博覧会が開かれる年の前年である（一八五五年五月から五六年一月まで開催）。

- (1) Eliza Alicia Lynch, *Exposición y Protesta*, 1875, Buenos Aires.
この書物は未見である。大英博物館(British Museum)が所蔵している由で、冒頭部分の英訳が左記に掲げられてある。
Brodsky, *op. cit.*, p. 2.
 - (2) 松村起・富田虎男『英米史辞典』(二〇〇〇年、研究社)三六二ページ。
 - (3) Young, *op. cit.*, p. 32 et seq.; Brodsky, *op. cit.*, p. 11.
 - (4) リンチ夫人がクラシック音楽を愛好し、パラグアイに渡ったあとも、ピアノの演奏に興じていたことが伝えられている。もっとも、フランシス・リストが若いエリーザのピアノ演奏を聞いて、コンサート・ピアニストの道を進むべし、と助言したと言つ挿話が紹介されているが、これは、神話であるのか。Brodsky, *op. cit.*, p. 13. なお、小説と副題がついているリンチ夫人の生涯を描く下記の書物には、彼女のピアノ演奏を知人が懐かしむ挿話が記述されている。Tucker, *op. cit.*, p. 241.
 - (5) 彼の名は下記のパラグアイの歴史辞典に収録されている。もっとも、リンチ夫人と結婚し、離婚しないため、内縁関係にあったリンチ夫人とロサーノは正式に結婚できなかった、という説明のみである。ただ、彼のフルネームが Jean Louis Armand de Quatrefoes と記述されている。R. Andrew Nickson, *Historical Dictionary of Paraguay*, 2nd edition revised, enlarged, and updated, 1993, Metuchen, N. J. & London (The Scarecrow Press, Inc), p. 480. しかして丁寧な調査を経て記述された伝記には Xavier Quatrefoes とある。Brodsky, *op. cit.*, p. 14 et seq. アメリカのマイアミ大学教授 Warren も同じく Javier (Xavier) Quatrefoes と記述している。Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, p. 174. ところが、七年前の著書では Hickson と同じく Jean Louis Armand de Quatrefoes と記述している。Paraguay, p. 236。新著で訂正しているように思われ、Nickson の記述は誤っているように思われる。
- この夫婦は別居した後、居住した大陸が異なり、出会うことはなかったようであるが、リンチ夫人がヨーロッパに帰り、「夫」ソラーノの遺産の取戻しに奔走する際、イギリスでは、当時、人妻が訴訟を提起するためには夫の同意が必要であるため、法律上、カトルファーシュ夫人である「リンチ夫人」は法律上の夫の同意書が必要となり、夫人は一八七〇年の暮れ、長く別居していたカトルファーシュをポルドーに訪ね、一八五四年に委任状を作成した旨の文書にカトルファーシュに署名してもらったといふ。Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, p. 174.

- (6) Young, *op. cit.*, p. 35.
- (7) Young, *op. cit.*, p. 36.
これに対して、エリーザは、騎兵隊に勤務する若い士官と親しくなり、アバンチュールが、一線を越え、士官とエリーザはパリに駆け落ちする、これが、エリーザの婚姻の破局、パリ行き事情という説がある。この士官はロシアの貴族で、裕福で、サンジェルマンにアパルトマンを持っており、二人はそこに落ちつくが、かりそめの恋は長続きしない。上昇志向の士官は若い人妻との同棲を栄達の障害とみたのが、それとも、その頃、急を告げていた故国の戦争（クリミア戦争一八五三年―一八五六年）の噂で帰国を余儀無くされたのが、二人の関係に終止符がつけられた、という。Brodsky, *op. cit.*, p. 16 et seq.
- (8) Brodsky, *op. cit.*, p. 20.
- (9) 瀬沼茂樹「椿姫の墓（世界文学散策 2）」（村上菊一郎／鈴木力衛訳『ボヴァリー夫人／椿夫人』（世界文学名作全集 12）昭和三三年、平凡社）別刷り解説
- (10) Young, *op. cit.*, p. 40 et seq. これに対し、エリーザは、侍女を連れて、フランスの客船に乗船、プエノスアイレスに行き、一日遅れて出航したセラノ乗艦の軍艦とプエノスアイレス港で合流したと言つ説明がある。Rees, *op. cit.*, p. 29 et seq.
- (11) Brodsky, *op. cit.*, p. 2.

四 パラグアイの歴史（その1、独立まで）

パラグアイの詳細な歴史を記述することは本稿の目的ではないが、リンチ夫人の「夫」となるソラーノ・ロペスが政治の舞台に登場する事情、背景、また三国同盟戦争で争うアルゼンチン、ブラジルなどの国際関係を理解するために、一九世紀半ば過ぎまでの歴史を瞥見しよう。⁽¹⁾

現在のパラグアイを含む、グアラニ族が居住する地域に初めて足を踏み入れたヨーロッパ人はポルトガルの冒険者で、一五二四年、パラグアイ河に到達する。この数名の冒険者は、先住民の要請に協力、遠征に同行し、インカの周辺を略奪する。その獲得した「銀」の情報が大西洋沿岸のスペインの冒険者に伝えられ、一五二六年、カボットはパラグアイ河を遡航する。数年の後、スペイン国王カルロス五世は、ポルトガルの計画を聞き、武將を派遣し、ラプラタ川からベルーへのルートの開拓を命ずる。この探検という作戦の一環で、一五三七年、パラグアイ河の岸辺に小さい要害が建設される。これが、現在のアスンシオン市の創設となる。ラプラタ河の河口のブエノスアイレスは、近隣の先住民がスペイン人に友好的でなく、食料の自給の点でも不利な状況にあつたので、その広大な地域を支配する総督はアスンシオンを本拠地とする。こうして、アンデスの黄金郷から大西洋、さらにヨーロッパ国への交通において、パラグアイは戦略的にも重要なボジションを占めることになる。そして、先住するグアラニ族がスペイン人に友好的で、両者の間で通婚が進み、混血する。

カトリックの聖職者は、早くも一五五六年にアスンシオンに、そして、布教のため、イエズス会の修道士が一五八八年にこの地域に入っている。イエズス会の修道士はパラグアイの南東部、パラナ河の東側（この地域は、現在、アルゼンチン領、ブラジル領である）で布教活動し、教化村を建設し、先住民に手工芸を教え、種子を分与する。そして、先住民の搾取に反対し、ブラジルからの奴隷狩りの攻撃から、パラグアイ人の保護に努力する。しかし、一七六七年のイエズス会追放令により、この努力の成果はすべて崩壊する。修道士たちが二〇〇年近くその地に居住したにもかかわらず、教化村の廃墟を除いて、その痕跡を残していない。現在も、地方のグアラニ族は多くの点でその固有の伝統の下で暮らしており、その言語も話され、パラグアイは、バイリンガルの国であり、グアラニ語は、その国の独立の象徴となっている。

イエズス会の活動があつたものの、パラグアイは、引続き、アスンシオン市のスペインの植民地当局の支配下にあつた。アスンシオンは河川交通の要所であつたが、海への出口の必要から、一五八〇年、放棄されていたブエノスアイレスが再建される。そして、一六一七年、ブエノスアイレスはアスンシオンから切り離される。当時、企画されていたチャコ經由でアンデスの鉱山への交通路が実現せず、スペインの植民地体制におけるパラグアイの重要性が評価されなくなつたのである。僅かに、その頃、強まっていた、ブラジルから南方への軍事圧力を押さえることにその役割しかなかったのである。

一七二一年、スペイン本国から派遣された官僚の主導の下で、アスンシオンの有力市民がスペイン総督の罷免を求めて蜂起する。当時、パラグアイはベルーの副王の管轄であつた。主導した官僚は捕らえられ、処刑されるが、地元民の抵抗は一五年近く続き（コムネーロスの乱）、一七三五年、国王軍が勝利、ここで、法と秩序が回復される。しかし、この騒乱に乗じて、ポルトガルは北部の広大な地域を併合し、現在、ブラジルの一部となっている。

一七七六年、ラプラタ副王領が設置され、逆にパラグアイはその管轄下に編入された。しかし、外部、ブラジルからの侵略に対する防衛の負担（民兵として数カ月勤務、そのため、労働力が不足する）、農産物の価格低下による輸出収入の減少、加えて、ラプラタ副王領の管轄下に入り、ブエノスアイレスの下位におかれるという不満がパラグアイ側に鬱積する。そして、地理上の遠隔というが、閉鎖性がナシヨナリズムを醸し出す。一九世紀の初め、ナポレオンがスペイン本国を侵略し、国王を退位させた頃、アスンシオンの雰囲気はこういう状況にあつた。

一八〇六年と一八〇七年と、二度にわたつて、イギリス軍がブエノスアイレスに侵攻を試みるが、市民の義勇兵というが、民兵が防衛に成功、副王の権威が失墜する。一八一〇年五月、フランスに抵抗する、スペイン本国の中央評議会の解体の知らせが届き、ブエノスアイレスでカビルドが開かれ、スペイン本国の先例にならつて、評議會

(フンタ)の設置が決議され、評議会が統治権を掌握する。この時、独立の宣言はなかったが、これが、ラプラタにおけるスペインの支配の終りと理解されている。²⁾ブエノスアイレスの評議会はアルゼンチンへの無条件の加入をパラグアイに呼び掛けるが、アスンシオンのカビルドは拒絶。これに対し、ブエノスアイレスは、「解放」軍を派遣するが、パラグアイ人は、善戦し、アルゼンチン軍は敗走。パラグアイはスペインに対しても、またブエノスアイレスに対しても独立という考えがさらに強まることになる。一八一一年五月一四日の政変をひき起す。ブエノスアイレスの軍事的圧力に怯え、ブラジルの軍事援助を求めようとした総督を罷免するものであった。そして、一日、執政評議会が設置され、憲法制定の準備を始める。こうして、パラグアイの独立が達成される。もっとも、アルゼンチンがパラグアイの独立を承認したのは、一八五二年になってからである。

- (1) Carlos R. Centurión, *Historia de la Cultura Paraguaya*, 2 tomos, 1961, Asunción (Biblioteca "Ortiz Guerrero"), p. 1 y siges.; Pendle, *op. cit.*, p. 7 et seq.; Roett and Sacks, *op. cit.*, p. 13 et seq.; Conquest of Paraguay, Colonial Period, in [Nickson, *op. cit.*] p. 156, p. 140.
- (2) 中川和彦稿「ラテンアメリカの独立と先駆的憲法」『成城法学』六一号(平成二年三月)、八九ページ。

五 パラグアイの歴史(その2、フランシアの独裁)

独立を達成したものの、新生パラグアイに問題が山積していた。特に、アルゼンチンというが、ブエノスアイレスとの関係である。執政評議会の一員であったフランシア(José Gaspar Rodríguez de Francia)は、ブエノスアイレスと対等の連邦の考えを提案し、一八一一年一〇月、協定が結ばれる。これは、事実上、パラグアイの独立を承認

するものであつた。しかし、その頃、バンダ・オリエンタル（現在のウルグアイ）を始め、諸地方との抗争、さらに、南アメリカに残るスペイン軍との内戦に明け暮れていたブエノスアイレス政権がパラグアイの兵力の活用を試みようとする、パラグアイはこれに反発、協定は無効となる。その対抗策として、ブエノスアイレス政権はパラグアイを封鎖するなど、種々な方策をとる。こういう事態を前にして、一八一三年一月二日、パラグアイは正式に独立国であることを宣言し、ブエノスアイレスとの協定を拒否する。このような政治の動きを主導したのはフランスである。⁽¹⁾

一八一三年の終り、パラグアイの国会はフランスを最高執政に推戴する。任期は五年、しかも、執政をチエツクする、また均衡をとる機関もないままであつた。そして、一八一六年、国会はフランスを終身執政とする。フランスの意思がパラグアイでは「法」となる。これが、かれが逝去するまで、二四年も続く。

フランスは一七七六年生まれであつたから、パラグアイの独立運動にかかわつたのは四〇歳台の半ばであつた。母親はパラグアイの支配階層に属し、父親はブラジルの煙草業者であつた。コルドバ大学（現在、アルゼンチン領）で神学を学び、博士の学位も取得するが、聖職者への門戸が閉ざされ、やむを得ず、進路を法曹に転じ、アスンシオンで、弁護士として成功する。彼も、スペインの植民地支配体制の下で、栄達を阻まれていた植民地生まれ（クリオージョ）の一人であつた。フランスはフランス語、ラテン語を解し、なかなかの蔵書家で、ルソー、ヴォルテール、デイドロー、ユークリッドなどを読み、フランス革命の賛美者であつた、ようである。⁽²⁾

フランスは権力を掌握すると、国会は、執政が必要と判断する時に限り、開催されることになる、フランスは、あらゆる政治活動を禁止し、特別の宗教上の祝日を除き、大衆の集会を禁止する。フランスは彼の政治に対する批判は許さず、軍隊と一群の密偵の力で、パラグアイを統治し、独裁への道を歩み始める。彼は、その体制の

打破を目指す動き、あるいはブエノスアイレス政権と通謀する陰謀⁽²⁾を危惧する。さらに、それまでのスペインの植民地に対する制約がなくなり、外国人が独立したラテンアメリカに富を求めてなだれ込み、パラグアイを「略奪」することを黙視できない。フランスは外部世界との文化および通商の関係を断つ。既にアスンシオンに居住していた外国人は追放され、再入国は許されない。外国からの移住は禁止される⁽³⁾。この禁令を知らずに入国したフランス国籍の博物学者の出国を求めて、南米解放（独立）の英雄シモン・ボリーバルが乗り出さざるをえなかったほどである⁽⁴⁾。教会も、それまでの特権を奪われ、教育は軽視というより、無視される。

対外関係について、特に膨張政策をとる隣接するブラジルとアルゼンチンとの外交が難問であった。開拓地を襲撃する先住民の問題でブラジルとの関係が緊張し、通商関係が一時断絶することもあったが、特定の地のみで、かつ、執政の統制の下で再開される。

このような強権的な政治であったにもかかわらず、フランスアの政敵ですら、彼の謹厳で清廉な私生活を認めている。そして、彼の鉄のような意思に基づき「統制」により、パラグアイは、スペインから独立を獲得したものの政争、混迷が続く、他のラテンアメリカ諸国と異なり、安定した状況にあった。そして、「鎖国政策」により、パラグアイの国内経済は発展し、多様化する。国民意識が芽生え、自立心が高まる。外国の影響を受けないことから、国民の同一性が維持出来た、とも言われる⁽⁵⁾。一口に言って、フランスアの下で、パラグアイに自由はなかったけれども、パンと秩序はあったのである⁽⁶⁾。

(1) Pendle, *op. cit.*, p. 15 et seq.

(2) Roett and Sacks, *op. cit.*, p. 23; Young, *op. cit.*, p. 8 et seq.

- (3) Pendle, *op. cit.*, p.16 et seq.
- (4) Parguay, in [*The New Encyclopedia Britannica*, Volume 25: Macropedia, 15th edition, 1988, Chicago: Encyclopedia Britani ca, Inc.] p.427.
- (5) Pendle, *op. cit.*, p. 17.
- (9) Herring, *op. cit.*, p. 713.

六 パラグアイの歴史(その三。カルロス・ロベスの独裁)

一八四〇年九月二〇日、フランシアが亡くなる。後継者指名の遺書なく、後継する政治家、官僚を養成することもないままの逝去であった。そのため、パラグアイはしばらく混乱するが、ほどなく、一八四一年三月、カルロス・アントニオ・ロベス(Carlos Antonio Lopez)が、国会で二人の執政の一人に選ばれ、さらに、一八四四年、議会で大統領に選出される。カルロスの逝去後、長男が大統領職を承継している。国王のように、「ロベス二世」「二世」という言い方もあるが、パラグアイは王国ではないので、父子を区別するため、本稿では「カルロス」と、名で呼ぶことにする。ところで、その頃、わが国では、その三年前の一八四一年に、天保の改革が始まっている。一八四二年に、清がアヘン戦争で敗れ、降伏している。

カルロスは一七八七年の生まれ、父親は洋服仕立で生計をたてており、カルロスは法律を学んだ後、「レアル・コレヒオ・デ・サン・カルロス」で美術と神学を教授していた。一八一九年、フランシアが同校を閉鎖、失職したカルロスは田舎の農園に隠棲する。フランシアの死後、一八四一年、カルロスは国軍の書記官に選出される。これが彼の政界入りの第一歩で、続けて、第二執政に選任され、任期が満了する一八四四年に大統領に選出される。カ

ルロスの大統領選出に先立って、国会は憲法を制定する。この憲法の草案はカルロスが実質的に起草したもので、三権の分立を明定し、また、奴隷取引の禁止も規定した（これは、一八四二年法の追認であった⁽²⁾）。この奴隷廃止はアメリカより二〇年、フランスより四年先立つ。

カルロスは、原則として、フランシアの統治の方針を継承した。しかし、変革を伴うものであった。カルロスは、まず、フランシアが逮捕していた政治犯六〇〇名の多くを釈放した。さらに、それまでの鎖国政策から開国に転換し、通商、産業の振興を進める。外国人は、パラグアイの市民と同じく待遇された。波止場が整備される。道路を建設し、七二キロにせよ、パラグアイで最初の鉄道を敷設する（日本における新橋・横浜間に鉄道が開通したのは一八七二年）。通信も整備、農産物の改良、紡績、製紙、陶業、インク、武器製造を立ち上げる。一八四五年、その国で最初の新聞が政府の援助で発刊される（日本における日刊新聞の創刊は一八七一年）。小学校が四〇〇校開設され、二四〇〇名の児童が入学する（日本の学制発布は一八七二年）。パラグアイの英才のため、海外留学の奨学金を設ける。外国から教師、医師、技術者を招聘する。このような施策を見る限り、カルロスは、前任のフランシアと同様に独裁者であったけれども、開明的で、その国の経済は発展し、秩序は保たれ、国民は幸せであったようである。そして、海外から、パラグアイは発展しつつある国として評価されるようになる。しかし、隣接するアルゼンチンとブラジルとの関係は微妙であった。一八五二年、アルゼンチンの政治を壟断していたローサス（Juan Manuel de Rosas）が失墜し、アルゼンチンはパラグアイの独立を承認、パラグアイは河川航行の自由を獲得する。これはパラグアイにとりプラスで、通商は三倍に増加する。この経済の活況は国の歳入を増やし、これにより、パラグアイは軍備を拡張する。無論、アルゼンチンおよびブラジルの圧力に対抗するためであった⁽³⁾。

以上、カルロスの治世のプラス面を紹介したが、私生活では、フランシアの清廉さと対照的に、カルロスは貪欲

で、端的に言えば、私腹を肥やす。もともと、カルロスの夫人は富裕な牧場主の娘であったが、カルロス大統領は国の財産の不動産を私益のために横領する。その上、自分の子供に大統領職を承継させ、ロベス王朝の構築を構想していたとも言われる。⁽⁴⁾

一八五三年、カルロスは長男のフランシスコ・ソラーノ・ロペスを特派大使として、ヨーロッパに派遣する。主な目的は武器弾薬の買い付け、軍艦の発注、技術者の採用である。その時、ソラーノは二七歳。その前、一八歳で准将に補されており、異例の抜擢であり、大統領は息を後継者とすべく、手を打っていたのである。⁽⁵⁾

(1) カルロス・アントニオ・ロペスの生い立ちについて、左記を参照されたい。

Nickson, *op. cit.*, p. 252 et seq.; Centurión, *ob. cit.*, *Tomol*, p. 218 y sigtes.

(2) Otero, *ob. cit.*, p. 57. なお、この一八四四年憲法のテキストも収録されている。p. 127 y sigtes.

(3) Young, *op. cit.*, p. 18; Roett and Sacks, *op. cit.*, p. 28 et seq; Pendle, *op. cit.*, p. 18 et seq.

(4) Roett and Sacks, *op. cit.*, p. 28.

(5) Roett and Sacks, *ibid.*

七 フランシスコ・ソラーノ・ロペス

フランシスコ・ソラーノ・ロペス (Francisco Solano López) は一八二六年七月二四日、カルロスの長子として生まれた⁽¹⁾ (一八二七年説もある)。父親のカルロスが政界に身を投じる前である。父親と区別するため、彼は、一般に、姓ではなく、名で呼ばれる。それも、フランシスコは比較的ありふれた名であるためか、ミドルネームの「ソ

ラーノ」で呼ばれる。本稿でも、この一般の呼び方にならっている。

ソラーノが誕生した頃、父親のカルロスは、教鞭を取っていた「レアル・コレヒオ・デ・サン・カルロス」の閉鎖により失職し、隠棲し、弁護士を開業するが、顧客は多くなく、決して豊かな生活を送っていなかったようである。⁽²⁾ 読み書きの手ほどきは父親から受けるが、やがて、聖職者が主宰する幾つかの学校で教育を受ける。⁽³⁾ 地理、歴史、代数、文法、古典（ラテン語）、そしてフランス語、英語、ポルトガル語を学び正確に会話ができるようになる。しかし、教師はかなりの忍耐を要した。ロサーノが勉学より屋外の遊びを好んだ。しかも、ソラーノは、良く言えば自主性が強い、あまり従順な子供でなかったからである。ただし、ソラーノは地理と歴史、とりわけ、軍事史が好きで、ナポレオンの戦争史に熱中し、フランスの栄光に憧れる。ソラーノのアイドルはナポレオンであった。

思春期を迎えると、ソラーノは性的に早熟で、紅灯の巷に出入りし、その請求書が大統領宮殿に送付させ、父親の大統領に支払わせる。良家の子女も追いまわす。修道院に避難した女性を追って、修道院に乱入する。こういつソラーノの悪行に手を焼いて、カルロスはソラーノを准将に任命し、戦場に送ることにする。ソラーノは一八四六年、パラグアイはコリエンテス（州）と相互防衛協定を締結する。この協定は、暗黙裏に、政治を壟断していたローサスに対するものであった。ところが、暗黙の了解に反し、エントウレ・リオ州の知事（同州を独裁する）ウルキーサ（José Justo de Urquiza）が、突然、軍を率いて、コリエンテス州に侵入、当然ながら、軍事支援をパラグアイに求める。ソラーノは、最近制定されたばかりの国旗を掲げ、部隊の先頭にたつて、進軍する。しかし、現地入りしてみると、双方の間で、銃火を交えることなく、和平が成立しており、中央政府（ローサスの独裁）に対する相互援助が約されていた。ソラーノは、現地で愛人を得て、帰国する。⁽⁴⁾

帰還すると、ソラーノの悪行は止まない。相手は、また良家の子女である。婚約者のいる女性に横恋慕し、拒絶

されると、結婚式当日、花婿を殺害する。そのため、花嫁は発狂する。そのため、パラグアイの年頃の娘を持つ家庭では、旅券を入手し、国外に脱出する者が続出したと言われた。⁽⁵⁾ こう続くソラーノの悪行に大統領も処理に困り、ソラーノを国外に出すことにする。

パラグアイにとり脅威であるアルゼンチンは政争に明け暮れていた。その争いの主役の一人が、前述したウルキーサで、一八五二年、ローサスを退陣に追い込む（ローサスは家族とともにイギリスに亡命する）。しかし、ブエノスアイレスはウルキーサに友好的でなく、両者は一触即発の状況にあった。隣国の誼で、カルロス大統領は調停役をかつてで、ソラーノを派遣する。名誉回復の機会を与えるためでもあった。ソラーノは将官に進級、特命全権を付与され、ブエノスアイレスに向かう。ソラーノは、弁説巧みに両者を説得し、調停に成功する。⁽⁶⁾

ソラーノは英雄として、アスンシオンに帰還する。父親の大統領は長男を国防大臣に任命する。そして、依怙鼻肩の非難を回避すべく、次男のベニーノ（Angel Benigno López）をアスンシオン守備隊の司令官に、三男のヴェナシオ（Venancio López）を海軍大佐（まだ軍艦がないのに）に任命する。⁽⁷⁾

さらに、大統領はソラーノを特命全権大使として、ヨーロッパに派遣する。パラグアイを世界に知らしめること、チャコ地域への移住者を誘致すること、加えて、イギリスから軍艦を購入することが主要な目的であった。使命は重大であった。一八五三年六月二日、二発の祝砲、母親以下、家族の涙に見送られて、ソラーノの一行は出立した。⁽⁸⁾ この一八五三年は、ペリーが浦賀に来航した年である。

ソラーノと行を共にしたのは、実弟のベニーノ、ヴェナンシオ、文化人のゲーリ（Juan Andrés Gelly）、バリオス將軍（Vicente Barrios）などである。⁽⁹⁾ 一行は、まず、イギリスを訪問、ピクトリア女王に拝謁、パラグアイ政府の代理人となるジョン・アンド・アルフレッド・ブライス商会と契約、次いで、同商会を介して、軍艦を発注する。そ

れから、同年一月、フランスに渡り、翌一八五四年一月、ナポレオン三世に拝謁する。その後、前述したように、リンチ夫人と出逢う⁽¹⁰⁾。

- (1) Centurión, ob. cit., Tomo 1, p. 258 et seq.
- (2) ソラーノの幼少時代については、左記にまつていさ。
Bray, ob. cit., p. 77 y sgtes.; Centurión, ob. cit., Tomo 1, ibid.
- (3) 本稿の本筋に直接関係がないが、教育にあたった教師の名前が伝えられている。ソラーノは、最初、Academia Literaria に入学する。その時の校長が Marco Antonio Maiz 師。その後、フランシスコの Miguel Albornoz 師について哲学を学ぶ。マドリド・イエスス会の Bernardo Pares, Anastasio José Calvo, Fidel Vicente López および Manuel Martos が創設し、指導していた Instituto de Moral y Matemáticas に在籍した (Centurión, ob. cit., Tomo 1, p. 259)° これに対し、パラグアイの将校であった Bray 氏 Juan Pedro Escalada の名を挙げ (ob. cit., p. 86)° 丁寧な調査を経て、リンチ夫人の評伝を著した Young 氏 Marco Antonio Maiz の名を記述する (op. cit., p. 21)°
- (4) Young, op. cit., p. 22 et seq. なお、この女性に Juanita Pesoa と書いたパラグアイの歴史辞典に採録されている。Nickson, op. cit., p. 464 et seq.
- (5) Young, op. cit., p. 23. なお、殺害された花婿は Carlos Decoud° 花嫁は Carmencita Cordal といい、両者は、パラグアイの歴史辞典に採録されている。ただし、花嫁は、愛称の Carmelita で掲載されている。Nickson, op. cit., p. 175, p. 99.
- (6) Young, op. cit., p. 24 et seq. もっとも、この調停による和平は長続きせず、フエノスアイレスは連邦から離脱し、連邦に復帰するのは一八五九年である。
なお、混乱に陥っていた当時のアルゼンチンの政情について、左記を参照されたい。
増田義郎編『ラテン・アメリカ史』(二〇〇〇年、山川出版株式会社)、特に、松下洋執筆「の四章」245ページ以下。
- (7) Young, op. cit., p. 26.

(8) Young, *op. cit.*, p. 26 et seq.

(9) Nickson, *op. cit.*, p. 355.

(10) Nickson, *ibid.*

八 アスンシオン到着

ロサーノとエリーザを乗せた外輪船はモンテビデオから、航行可能なパラグアイ河を遡って行った。周囲の景色はエリーザにとり初めての光景であり、すべて珍しかった。浮島のように見える大きい鬼すいれん、砂州に横たわる、丸太のように見えるワニ、魚を捕らえるアオサギ、そして通りすぎる先住民の小さな集落。こつした静寂な世界をエリーザは天幕の下から眺めた。やがて、アスンシオンが眼下に入った。土壁の平屋が果てしなく続く。そのなかで、税関、カビルド（市議会）の庁舎、フランシアの旧邸、病院などが目立つ建造物であった。その頃、アスンシオンの人口は二万と言われた。¹⁾ 外輪船「タクアリ」が錨を降ろすと、フランシスコ・ソラーノが乗船している。ニューズが町中に伝わり、四方八方から人が出て、波止場に集まる。そして、舷側にソラーノが姿を表すと、期せずして、万歳の声が沸き起こった。彼の帰国を歓迎する、庶民の素朴な感情の表現であった。民衆はソラーノの服装に戸惑う。見なれている軍服、あるいはポンチョ（民俗衣装）ではなく、フロックコートに細みのズボンを着用していたからである。さらに、民衆を驚かしたのは、ソラーノの傍らに寄り添う女性の姿であった。その日、エリーザは薄紫色のドレス、それにマッチするボンネットを被り、妊娠した身体を隠すようにレースのストールを羽織っていた。それよりも、金髪、碧眼の女性を民衆が目にするのは初めてであった。単純なグアラニの人々には彼女

が天界から訪れた人に見えた。そして、水辺で思わず跪いた。しかし、その時、民衆の多くにとり、やがて、彼女が死の天使となることを知る者はほとんどいなかった。⁽²⁾

二人のアスンシオン上陸は一八五五年一月二日であった。南半球であるから、一月は真夏である。ブエノスアイレスの緯度は東京とほぼ同じで、夏と言っても、東京と同様であって、まだ我慢できる暑さである。しかし、アスンシオンは熱帯で、暑い上に、河に面しているため、湿度も高く、パリに長く暮し、しかも妊娠中のエリーザにとり決して良い環境ではなかった。⁽³⁾

波止場には、大統領始め、ソラーノの家族が出迎えていた。彼は父大統領の馬車に大股に歩み寄り、エリーザを紹介した。大統領は、息がパリから軍服と同様に愛人を連れ帰ったことを受け入れる。エリーザは輝くばかりの笑みを浮かべて、大統領に手を差し伸べたが、大統領は軽く頷いて、馬車を発車させた。ソラーノの顔は不快感で引きつる。次いで、母親と二人の妹 (Inocencia と Rafaela) の馬車に歩を移した。三人とも肥満体で、黒いドレスである。ソラーノがエリーザを紹介すると、それを無視するように母親は、馭者に家に、と指示した。最後の馬車に、弟二人ベニーノとヴェナンシオが乗っていたが、兄が近づくのを待つことなく、馬車を発車させた。ベニーノは、ヨーロッパ出張に同行しており、兄がエリーザを連れ帰ること反対であった。エリーザは歓迎されなかったようである。エリーザ (リンチ夫人) の評伝を執筆した、ある著述家は、あたかも現場に居合せたかのように状況を、以上のように叙述している。⁽⁴⁾

(1) Brodsky, *op. cit.*, p. 69.

(2) Young, *op. cit.*, p. 43 et seq.

(3) アスンシオンにおける真夏の気温は華氏九二度から一〇二度という。Brodsky *op. cit.*, p. 64.

(4) Young, *op. cit.*, p. 45 et seq. これに対し、エリーザはブエノスアイレスで出産後、子供と侍女を連れて、アスンシオンに赴いており、ソラーノの出迎えもなかった」と記述する著者もいる。Rees, *op. cit.*, p. 40 et seq.

九 アスンシオンにおける生活

割当てられた宿舎（邸宅）にエリーザを残し、ソラーノは、一人、大統領官邸に参上する。帰国報告のためである。彼は、両親に会うなり、波止場の冷たい扱ひの不满を訴え、当り散らした。軍隊から身を引く。国を出て行く。誰も自分を認めてくれない。これに対して、母親は、何故、アスンシオンの娘を、出来たのに、選ばなかったのか、と消え入るような声で息子に問いかけた。そして、噎り泣きながら、何があつても、あの女を受け入れることができない、と呟く。しかし、ソラーノにとり、エリーザを受け入れる、受け入れないことはどうでもよかつた。彼にとつて関心事は南米で最精銳の陸軍の建設であり、そのためのプロシアからの軍事教官の招聘、ドックの建設、鉄道の拡張、移民の振興、と、彼の熱弁は止まらない。老いた大統領は、リンチ夫人を連れて来たことは無分別であるが、それはそれとして、息子との再会を喜んでいた。ソラーノだけが胸襟を開いて話ができる相手であつた。ソラーノだけが、構想を持ち、彼の目標を理解する。後二人の息子はただへつらうばかりである。それから、大統領は、肝心の出張の成果の報告を求めた。技師、農業専門家、医師など、いわゆる「お雇ひ外人」との契約状況、チャコへのフランスからの移民計画の進展、海外におけるパラグアイの評判、イギリス、フランスの実情、と、家族の者が退室した後も、二人の話は続いた。大統領は、頼りにしている、と何度も繰り返す言葉は、その老いを示すも

のもであった。しかし、一点だけ、父親が頑固であった。彼も家族も、誰として、エリーザを受け入れようとしなかった。それでも、ソラーノは、父大統領の右腕であることに満足して、辞去する⁽¹⁾。

その頃、アスンシオンでは、町中、土木工事というか、建設作業が進められていた。「お雇い外人」である建築家の指導の下で、ミラノのスカラ座を模倣したオペラ・ハウス、ベルサイユ宮殿に劣らない宮殿、さらに、図書館、郵便局、倶楽部ハウスなどの建設作業が進行中であった。費用は問題ではなかった。大統領からソラーノは白紙委任されていたからである。男性はことごとく徴用された。一〇歳にも満たない小児まで、この壮大な計画完成のため、日夜を問わず、石を運んでいた。この工事にリンチ夫人は口を出す。郊外をソラーノと散策中、地形を見て、リンチ夫人は、パリのロンシャンの競馬場を思い出し、競馬場の建設を提案する⁽²⁾。

さらに、割当てられていた宿舎（邸宅）に満足していなかったリンチ夫人は街の中心から五マイルの地を選び、住居を建設する。初めて出産する子供が、その地位に相応しい邸宅で誕生すべきである、という理由から、その工事は最優先された。その邸宅は、パラグアイで最初の二階建ての建物となる。リンチ夫人は、この邸宅にフランスのタペストリー、東洋の敷物を入れ、磁器を置き、自分の好みに合わせる。そして、彼女はそこで、多くの時間を過ごし、裁縫、音楽（ピアノ）の練習、読書、語学（スペイン語とグアラニ語）の学習をしていた⁽³⁾。夫人は決して怠惰ではなかった。その頃、アスンシオンを訪れたアルゼンチンのジャーナリストは、リンチ夫人の私宅を訪問した時の印象を夫人の優美さ、接待の典雅、室内装飾の良さを賞嘆して記述している⁽⁴⁾。このジャーナリストはヨーロッパ各地に特派されており、ヨーロッパの都市の事情にも通じている人である。

しかし、この邸宅を訪問する客は稀であった。夫人を自宅に招く人もいなかった。アスンシオン到着時から彼女は歓迎されない「よそ者」であった。むしろ辱められる扱いを受けていた。しかも、それは大統領、その家族に限

られず、外国の外交団、居留民、さらに、スペイン系の家族まで、リンチ夫人を無視する、暗黙の申し合わせがあるかのような雰囲気であった。しかし、このような態度をとる人たちの教養というか趣味は、リンチ夫人のそれと比べると、はるかに劣っていた。十分の一以下、と言いつ切る説もある。⁽⁵⁾

この生活の単調さを一時でも追い払ったのは長男の誕生であった。ソラーノに、リンチ夫人の前、内縁関係にあった女性がおり、子供が三人いることは知れわたっていた。したがって、リンチ夫人の長男出産をめぐって、誰がソラーノの後継者となるか、巷の噂になる。ソラーノは、このような噂を打ち消すべく、一〇一発の祝砲を命ずる。しかし、まだ問題があった。子供が誕生すると、教会で洗礼の儀式がある。ソラーノはアスンシオンのカテドラルでの挙式を提案するが、大統領は出席を拒否、またアスンシオンの司教（大統領の実弟）も大統領に倣う。やむを得ず、近くの礼拝堂で洗礼を受け、ソラーノと同じく、フランシスコと命名される。ソラーノはこの子を溺愛する。⁽⁶⁾ 父親と区別するため、「パンチョ」の愛称で呼ばれる。

出産後、健康を回復して程なく、夫人は、また妊娠したことに気付く。望んでいたことではなかった。一八五六年八月六日、第二子を出産する。女子で、夫人の実姉、実母の名を取って、コリンヌ・アデライデ (Corinne Adelaide) と命名する。しかし、この子は六ヶ月後、一八五七年二月に亡くなる。夫人は悲しみにくれ、取り乱す。そして、近くのラ・レコレータの墓地に葬られる。⁽⁷⁾ この葬儀には、弟の一人ウエナシオがロペス家を代表して出席している。しかし、祖父母にあたる大統領夫妻、叔母にあたるソラーノの姉妹二人、伯父にあたる、もう一人の弟のベニーンは欠席している。⁽⁸⁾

リンチ夫人は健康で、その後も、毎年のように出産する。一八五八年にエンリーケ (Enrique Solano López) 一八六〇年にフエデリコ (Federico Noel López) 一八六一年にカルロス (Carlos Honorio López) 一八六二

年にレオポルド (Leopoldo Antonio López) である。このように絶えず身重であったにもかかわらず、リンチ夫人はパラグアイの発展、文化の向上に努力する。働き者であった。フランスから教師を招聘し、女学校、フランス語学校、音楽学校を開設する。スペインから高名の演劇人を招き、新築の国立劇場で演劇を催す。その初演の日、大統領、その家族、アスンシオンの上層階層の人たちが観劇する。大統領は生涯で初めての観劇であった。中央のボックスのリンチ夫人に観客の目が集中する。男性は半ば賛美の目で、女性は敬意あるいは羨望の目で見つめていた。このことが、アスンシオンの女性にリンチ夫人の存在を認識させたのである。⁽⁹⁾

このような活動にもかかわらず、ロペス家の女性、およびそれを取り囲むアスンシオンの上層階層の女性のリンチ夫人に対する態度は冷たい。敵意を帯びるようであった。しかし、パラグアイの経済開発が進むにつれ、欧米から技術者、投資家、商人たちがアスンシオンに来る。そして、事業のチャンスを求めて、リンチ夫人宅にソラーノを訪問する。やがて、男性だけではなく、その人たちの夫人、娘たちがリンチ夫人を訪問するようになる。夫人宅には、欧米の新着の新聞・雑誌があり、調度品も洗練されており、ヨーロッパの雰囲気があったからである。しかも、夫人宅には大型のピアノがあり、家庭的な音楽会？も開かれることもあった。なによりも、パラグアイの上層階層の婦人で外国語、フランス語、英語を解する人は稀であったのに、リンチ夫人は、欧米の最新の文学の動きも話題にできる人であった。⁽¹⁰⁾

- (1) Young, *op. cit.*, p. 47 et seq. ソラーノの家族、特に、母親のエリーザに対するかたくな態度の一因は、弟のベニーノの情報であった、と言われる。彼は、エリーザを連れ帰ることに反対であった。Rees, *op. cit.*, p. 49 et seq.
- (2) Young, *op. cit.*, p. 54 et seq.
- (3) Young, *op. cit.*, p. 55 et seq.

- (4) Varela, *ob. cit.*, 260 y sigtes.
- (5) Young, *op. cit.*, p. 56.
- (6) Young, *op. cit.*, p. 57.
- (7) Young, *op. cit.* .p. 57 et seq. なお、墓石の墓碑名は、どついつわけか、全文英語で記されている。そして、亡くなった女の子の名前の姓は「リンチ」(母親のメイドウン・ネーム)である。リンチ夫人とソラーノとの間の男の子が全員父親の姓を名のっているのと対照的である。この墓碑名の英文のスペルの間違い(2箇所)を指摘する著者もいる。Rees, *op. cit.*, p. 74.
- (8) Rees, *ibid.*
- (9) Young, *op. cit.*, p. 59 et seq.
- (10) Rees, *op. cit.*, p. 81 et seq.

一〇 カルロス大統領の逝去とソラーノの大統領就任

一八六二年九月一〇日、カルロス大統領が逝去する。水腫を患っており、家族に見守られての大往生であった。大統領の晩年、特に病床に伏すようになってから、その後継をめぐっている取沙汰されていた。一般的な、当時の考え方では長男のソラーノが第一候補であったが、日頃の行状、性格から、彼が権力を掌握した場合を危惧して、次男のベニーノを推す声もあった。ベニーノ自身もそれを望み、画策していたようである。しかし、カルロスの臨終の遺言で、ソラーノが後継者に指名され、これに基づいて、一〇月一六日の国会で、満場一致で、ソラーノが大統領に選出される。任期は一〇年であった。¹⁾

大統領に就任したソラーノの最初の仕事?は父カルロスの功績を顕彰すべく、銅像を建立することで、国会に提

案じ、了承⁽²⁾される。

この新大統領の就任を切掛けに、外交団の夫人たちはリンチ夫人を訪問しはじめ。最初はフランス公使夫人、次いでアメリカ公使夫人、ポルトガル領事夫人と続いた。彼女たちは、訪問が遅れた無礼の言い訳をする。そして、ソラーノがパリの裏町で拾ったという悪意ある噂とはちがって、外交官の夫人たちが面談している女性がすぐれて洗練された美人であり、英語、フランス語、スペイン語、そしてグアラニ語を流暢に話すことに驚く⁽³⁾。さらに、パラグアイ政府との取引、武器など軍需品の売り込みを図る貿易商人はソラーノに接近し、やがて、政庁よりも、リンチ夫人宅で大統領と面談することが多くなる。そして、リンチ夫人の影響力の大きさに気付くと、夫人に取り入ることに狂奔する。夫人は富裕になっっている。一〇年前、ほとんど資産がないままパリから渡航して来た夫人は、今や、邸宅を三軒、さらに土地を所有し、特産品の輸出特権の一部も保有していた⁽⁴⁾。

翌一八六三年一月七日、大統領就任一年を記念し、舞踏会が国立の倶楽部で開催される。主催者が外交団である。主賓は無論大統領夫妻で、外交団、パラグアイに在留する外国人、アスンシオンの上層階層の市民たちも招かれる。その中で、リンチ夫人の優雅な装いが一際目立ち、語り種になる。今や、夫人がその街のファッションのリーダーとなっ⁽⁵⁾ていた。

その頃、ソラーノは、リンチ夫人の前夫との離婚の手続きを始めることを真面目に考え始めていた。当時のイギリスの法制度では特別法の制定が必要であり、しかも、カトリック教で婚姻していたため、ローマ法王の特免をつけることも必要であった。ソラーノは、リンチ夫人と正式に法的夫婦となるのは、二人の間で生まれた男の子、特に長男の「パンチヨ」を彼の後継者にするためには嫡出子でなければならなかったからであった⁽⁶⁾。

- (1) Centurión, *ob. cit.*, Tomo I, p. 260 y sgte.
- (2) Young, *op. cit.*, p. 71.
- (3) Young, *op. cit.*, p. 73.
- (4) Rees, *op. cit.*, p. 113 et seq.
- (5) Young, *op. cit.*, p. 79.
- (6) Young, *op. cit.*, p. 82, p. 87. なお、イギリスでは「離婚事件法一八五七」が施行されるまで、離婚は国会でそのための個別法律が制定された場合にのみ可能であったが、それ以後は裁判所の判決によって成立する。田中英夫編集代表『英米法辞典』、二六八ページ。カトリック教会では、信者間の結婚は秘跡となり、再婚は配偶者の死亡の場合にのみ認められる。結婚自体に問題がある場合には、無効宣言がなされ秘跡性が解消される。大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』(二〇〇二年、岩波書店)、一一九〇ページ。

一一 二国同盟戦争

前述しているように、パラグアイの独立当初から、隣接するアルゼンチンとブラジルという強国との関係が大きな問題であった。二国とも膨張政策をとり、パラグアイの犠牲の上でその国土の拡大を図っていた。フランスアは鎖国政策をとり、カルロスは外交関係の舵取りに苦勞する。しかし、その反面、国富の多くを軍備に当て、防衛力の充実に努める。それにもかかわらず、後継するソラーノに対して、カルロス大統領は病床でも、アルゼンチン、ブラジル二国とは、問題解決はペンで、剣に頼るな、と教示していた、と言われる。しかし、幼児の頃からナポレオンを崇拜していたソラーノは、パリ滞在中、ナポレオン三世に拝謁し、彼に心酔、やがて、何時の間にか、自身を南米のナポレオンと思ひ込むようになる。そして、アルゼンチン、ブラジルと並んで、パラグアイも南米の

国際社会をリードする立場に立つことを夢見るようになる。⁽¹⁾

ブラジルとアルゼンチンに挟まれ、緩衝国であったウルグアイでは、国内の政争激しく、ブラジルは、一八六四年、反政府派を支援する。これに対し、政府与党と友好関係にあったパラグアイは、八月末、ブラジルのウルグアイへの干渉は不快であり、ブラジルがウルグアイに出兵する場合、パラグアイも干渉する用意があることを通告する。このパラグアイの通告にもかかわらず、九月、ブラジル軍はウルグアイに入る。これにより、パラグアイはブラジルとの国交を断絶し、パラナ河とパラグアイ河のブラジルの船舶の航行を禁止する。そしてソラーノは、一月、パラグアイの水域に入ったブラジルの商船を拿捕、ブラジルのマトグロソへの出兵を命ずる。翌六五年一月、パラグアイは、ブラジル南部を攻撃すべく、アルゼンチンのコリエンテス州の軍隊の通行許可をアルゼンチンに求める。アルゼンチンがこれを拒絶すると、三月パラグアイはアルゼンチンに宣戦を布告する。一八六四年は、アメリカでは北軍がアトランタを占領、南北戦争が終結に向かっていた頃である。

開戦当初、マトグロソに侵入したパラグアイ軍は、ブラジル側の無防備もあって、多くの戦利品を獲得し、主力部隊は引き上げる。世間では、ソラーノの戦略に分があるように取沙汰された。また、当時、まだ奴隷制度を存続させているブラジルに戦いを挑む、奴隷制を廃止しているパラグアイに好意的な声が国際的になかったわけではない。しかし、それは一時に過ぎなかった。国力の違い、工業力の格差、パラグアイが内陸国であるため、河川を封鎖された場合、軍需品の調達が困難になること、などを考慮すると、戦局の帰趨は明白であった。しかも、ソラーノにとり、大きな誤算は、ウルグアイの政情の急変で、パラグアイの支援を求めていた政権が崩壊し、反政府派の政権が成立、そして、国論が統一されたアルゼンチン、ブラジルとともに、三国同盟条約が六五年五月、ブエノスアイレスで締結されたことである。

若干の戦鬪でパラグアイ軍が勝利を収めたこともあったが、大勢として、三国同盟軍が有利に戦いを進める。パラグアイ軍の兵士は勇敢で、死を恐れず突撃した。しかし、その国の人口が少ない。補充する兵が不足する。老人のみならず、小児まで動員せざるを得なくなる。齒の欠けた祖父とまだ年端の行かない孫が隊列を組む光景も見られたと言われる。女性も銃後の労役に動員される。総力を動員しての戦いであつた。

一八六五年の半ば頃から、パラグアイ軍は守勢にまわる。そして、アスンシオン防衛の拠点であつたウマイタの要塞を三国同盟軍が包囲する。六六年九月、和平の提案があるが、ブラジルの皇帝ペドロ二世のソラーノ放逐という頑な方針で不調に終る。六八年二月、アスンシオンに対し、河川艦隊による砲撃が始まり、市民は街から脱出する。リンチ夫人も子供を連れて逃避し、ソラーノと合流する。ウマイタから脱出した兵も含め、ソラーノは部隊を再編する。その頃、徹底交戦のソラーノの退陣を求める陰謀¹が発覚し、ソラーノの実弟二人ベニーノおよびヴェヌシオ、妹の結婚相手（義弟）二人を含め、政府、軍の幹部、さらに居留外国人多数が連座、処刑される（血の肅正裁判 *Tribunales de sangre*）。一八六八年二月までに処刑、また獄死した人は、一説によれば、五九六名²にのぼっている。その中には、上述したように、ソラーノの肉親、またリンチ夫人の知人も含まれていた。

六八年一二月、三国同盟軍の包囲網の間隙をリンチ夫人たちは脱出、二週間、七〇マイルの道のりを歩いて、六九年一月の中旬、セーロ・レオンに落ちつく。セーロ・レオンは、その頃、パラグアイの第三の都市であつた。しかし、その落ちついた生活も続かず、八月、新市のブラジル軍の来襲により、街を放棄、逃避する。ブラジル軍の追跡が厳しく、ソラーノ軍は転々と移動する。こうした逃避の途中でソラーノとリンチ夫人が財宝を埋めたといふ伝説³が生ずる。ジャングルで生活する先住民から情報を得て、ブラジル軍はソラーノの部隊の所在を正確に把握していた。ソラーノには反撃する兵力は残されておらず、武器弾薬も不足している。ただ逃げ回るだけであつた。

時期が相前後するが、一八六八年二月、新任のアメリカ公使マックマホンがアスンシオンに到着、戦場に急行し、ソラーノに信任状を捧呈する。彼は、陰謀に関係ありとされた前任者と異なり、ソラーノとリンチ夫人に友好的で、ソラーノの信頼を得る。ソラーノは、全財産をリンチ夫人に遺贈する旨の遺言を作成し、マックマホンに託す。そして、退去するマックマホンに夫人と子供たちを連れ出して貰うことも考える。しかし、リンチ夫人の頭にはそのような選択は全くなかった。多少誇張の嫌いがあるにせよ、彼女が兵を指揮していた、ともいわれる。⁽³⁾

一八七〇年三月一日の早朝、「敵襲」の声でセーロ・コーラの宿営地は騒然となる。ソラーノは兵に武器を取ることを命じ、婦女子は森に避難を指示する。リンチ夫人は馬車に子供たちといた。長男のパンチヨが馬車を動かそうとした時、ブラジル兵が接近する。母親の武器を捨てなさい、という声も届かず、パンチヨはサーベルを抜き、抵抗しようとしたところを殺害される。ソラーノは乗馬し、河の方に逃れるが、馬が泥に脚をとられ、落馬したところを、殺害される。⁽⁴⁾ これで、戦争は終わった。

(1) Pendle, *op. cit.*, p. 20 et seq.; Roett and Sacks, *op. cit.*, p. 28 et seq.; Nickson, *op. cit.*, p. 355; Warren with assistance of Warren, *Paraguay*, p. 2 et seq.

(2) Rees, *op. cit.*, p. 266.

(3) Warren with the assistance of Warren, *Paraguay*, p. 15.

(4) Rees, *op. cit.*, p. 289 et seq. なお、自殺説もある。歴史学研究会編『世界史年表』(一九九四年、岩波書店)、一三三三ページ。

リンチ夫人の金髪が目立ち、ブラジル兵は夫人を視認する。夫人はユニオンジャックの旗をかざし、イギリス国民であることを言い、正当な扱いを求める。子供たちを守るためでもあった。それから、運ばれて来たソラーノの遺骸、そして、彼女の目の前で戦死した息子の遺骸を埋葬する。ブラジル兵の助力を断わって、リンチ夫人は、生き残った四人の息子とともに、逃避行に同行していた友人のディアス夫人に手伝ってもらい、土を掘った。そして、夫と息子を埋葬した。死者に対する祈りの言葉はなかった。同行していたソラーノの母（前大統領の未亡人）は、埋葬に立ち会い、わが子、我が孫の遺骸に涙する。⁽¹⁾

翌二日、リンチ夫人の一行は、陸路コンセプシオンに、次いで、ブラジルの砲艦でアスンシオンに向かった。三国同盟軍の占領下のアスンシオンには、ロペス家二代の圧政を逃れ、亡命していた人たちが同盟軍とともに帰国し、臨時政府を樹立しており、三月一九日、ロペス家およびリンチ夫人の資産を没収する政令を発する。⁽²⁾ ソラーノの老母、妹二人は帰宅を許されるが、安全のため、リンチ夫人、子供たち、ディアス夫人は港に停泊中の軍用船（捕虜収容所の代用）に収容される。五月四日、臨時政府はリンチ夫人の資産を凍結し、夫人の裁判の準備を命ずる。戦争中、夫人は農地を取得していた。しかし、公有地の購入（払い下げ）は、代金を戦費に当てるためであり、また、私有地の購入は、敗戦を見越して、リンチ夫人の名義で財産を保全しよう、という旧所有者の考えからで、その資金はパラグアイ渡航の際に持参したものである、というのが夫人の言い分であった。⁽³⁾ リンチ夫人は、子供たちの教育、また元大統領の未亡人として体面を維持するために、パラグアイで貯えた資産が必要であった。しかし、これ以上、争つのは時間の空費、と判断し、ブラジルの保護の下で、アスンシオンを去り、そしてイギリスに向かった。⁽⁴⁾

リンチ夫人は三五歳。

パラグアイは疲弊しきっていた。しかも、その帰属をめぐる争っていた北部の領土をブラジルに、また、イェズ会が布教していた地域はアルゼンチンに割譲させられる。それよりも、最大の損失は人的資源であった。三国同盟戦争の開戦の頃、パラグアイの人口は五二万五千と見込まれていたが、戦後の一八七一年には二二万一千に減少する。しかも、そのうちの一〇万六千が女性、八万六千が子供、そして、男性は二万八千にすぎなかった。⁽⁵⁾

一八七〇年七月一八日、リンチ夫人、四人の男の子、ソラーノの他の愛人の娘で、リンチ夫人の養女となっているロシータ・カレラ、それに、長年の友人ディアス夫人の一行はザンプトンに上陸し、ロンドンに向かう。そして、エミリアノ・ペソア・ロベスの出迎えを受ける。エミリアノは、やはり、ソラーノの別の愛人の息子である。

「夫」と愛息を失ってから、まだ四ヶ月しか経っていない。リンチ夫人は現実に即して考える性格で、休む間もなく、翌日、リンチ夫人は、パリに立出する。⁽⁶⁾

一六年ぶりのパリである。今や、リンチ夫人は女浦島であった。パリはプロシアとの戦争で騒然としていた。夫人がパリに到着した、その日、七月一九日、ナポレオン三世はプロシアに宣戦を布告する。皇帝は、二一歳の皇太子を帯同して、前線に赴く。皇后ウジェニーは摂政として、パリに残る。しかし、リンチ夫人は、このような動きに目を向ける余裕がなかった。ロンドンに残した子供の末の子、レオポルド急死の知らせを受けたからである。夫人は取るものも取りあえず、ロンドンに急行する。夫人の立出後に具合が悪くなり、夕方に亡くなった、という。パラグアイで感染したマラリアであった。⁽⁷⁾ 半年の間に、「夫」、長男、五男と家族の三人を失ったことになる。しかし、夫人は、重なる悲しみに長く沈むことなく、子供三人をロンドン郊外のクレイドンの寄宿学校に入学させる。夫人は「夫」、また子供たちと家庭内ではフランス語で会話していたので、教育はフランスでと、当初、考えてい

たよつだが、パラグアイでの経験の後だけに、戦乱にこれ以上巻き込まれたくないという気持ちが優つた。⁽⁸⁾ 普仏戦争は、フランスに不利に展開し、九月四日、ナポレオン三世が降伏、皇后はイギリスに亡命する。翌七年一月、講和条約は締結され、高額な賠償金を課せられ、アルザス・ローレンを割譲する。三月、プロシア軍がパリに進駐する。リンチ夫人にとり、ブラジル軍によるアスンシオン占領の後だけに、二度、ホームレスになつた感じであつた。同じ三月末、パリで民衆が蜂起し、パリコミューンの動乱が五月末まで続く。⁽⁹⁾

- (1) Young, *op. cit.*, p. 189 et seq.; Rees, *op. cit.*, p. 289 et seq.; Brodsky, *op. cit.*, p. 234 et seq.
- (2) Warren with the assistance of Warren, *Paraguay*, p. 234.
- (3) Rees, *op. cit.*, p. 299.
- (4) Rees, *op. cit.*, p. 300 et seq.
- (5) Pendle, *op. cit.*, p. 22.
- (6) Rees, *op. cit.*, p. 303.
- (7) Rees, *op. cit.*, p. 304.
- (8) Rees, *op. cit.*, p. 305.
- (9) 福井憲彦編『フランス史(世界各国史 一二)』(二〇〇一年、山川出版社)三四三ページ以下。

一三 パラグアイ再訪と晩年

子供たちの入学手続きが終ると、リンチ夫人は、ソラーノと彼女のヨーロッパにおける代理人ジェロー氏から、「夫」がリンチ夫人と子供たちの生活費として医師のステュアート(William Stewart)に寄託していた金銭の支払い

を請求したところ、拒否されたことを知らされる。⁽¹⁾

スチュアート医師はスコットランド出身、クリミア戦争に軍医として従軍した後、アルゼンチンの英国人移住地の医師としてアルゼンチンに渡航するが、移住地の解散後、アスンシオンに行き、ソラーノの父、カルロス大統領の知遇を得、大統領の個人医となり、それから、後継したソラーノにも信頼され、リンチ夫人も含め、一家のホーム・ドクターとなり、平行して、パラグアイ陸軍の軍医監のような要職に就任しており、その頃、パラグアイ政府に勤務する外国人の中で最高給を与えられていた。医師は「寵臣」の一人であった。

一八七〇年七月三〇日、リンチ夫人はエディンバラの裁判所に債権の確認と支払いを求める訴えをスチュアート医師に対し提起する。その詳細な法律論議に本稿では立ち入らない。訴えの内容は次ぎの二者に大別される。一つは、マテ茶問題と言われるものである。一八六五年、三国同盟戦争勃発の頃、ソラーノ大統領はマテ茶を自己の名義でブエノスアイレスに輸出することが出来なくなり、スチュアート医師の兄弟がブエノスアイレスで貿易商であることもあって、医師の名前で輸出する。この取引の内容を記述する、一八六七年一月一七日付けの兄弟間の書簡をリンチ夫人は保管しており、その取引の利益はソラーノ、そして、夫人と子供たちが受取るべきものである、というのが夫人の主張で、この書簡も証拠として法廷に提出された。これに対して、スチュアート医師は大統領からの贈与であった、と反論した。二つは、金貨問題と言われるものである。一八六八年一〇月、戦局はパラグアイに不利に展開している頃、スチュアート医師はイタリア領事を介して、七万ドルの金貨をパラグアイから持ち出し、スコットランドの銀行に医師の名義で預託している。これは、本来、リンチ夫人に帰属するもので、この事情を明記する一〇月一七日付けの書簡を夫人は保管しており、これも提出する。これに対し、スチュアート医師は、その書類は脅迫、強制の下で書いたもの、と反論する。

この訴訟の進行をめぐって、いくつかの問題があった。一つは、リンチ夫人の立場である。この訴訟の形式上の原告は、リンチ夫人の「代理人」ジェロー氏であったが、実質上の原告リンチ夫人の資格である。本稿でリンチ夫人の呼称を用いているが、形式上というか法律上は、彼女は、「夫」カトルファージュとの離婚が成立していない以上、カトルファージュ夫人であり、当時の法制度では、夫の同意がなければ、訴えを出来なかつた。そのため、夫人は、二〇年も前に作成された委任状、およびその事情を七〇年に認証した書類を提出する。⁽²⁾ この訴訟には、ジェロー氏、リンチ夫人、スチュアート医師は出廷していない。法廷弁護士⁽¹⁾の法律論の争いであつたようである。医師の弁護士は、訴訟はパラグアイの法廷が管轄すべきであることを主張する、一八七〇年五月四日付けのパラグアイ臨時政府の政令（ロベス家およびリンチ夫人に帰属する全財産を没収する）を提出する、スチュアート医師の未払い給与、また、収用された医師夫人（パラグアイ人）の財産の補償であることの主張など、の論議を展開する。一年にわたつた審理の後、一八七一年八月、結審する。裁判官は、金貨問題について、陪審の結論にもかかわらず、リンチ夫人の熱意の故か、医師の主張を不信してか、新しい証拠の提出まで、判断を保留する。次に、マテ茶問題について、リンチ夫人側の主張を容認する。しかし、スチュアート医師が主張する未払い給与の額を差し引いた残額の支払いを命ずる。結果的には、夫人は労多くして功少なし、であつた。リンチ夫人の財産は、見込みよりかなり目減りした。なお、スチュアート医師は、それ以上の追求を逃れるためか、自己の破産を申立てた後、アルゼンチンに出国する。

こうしている夫人に、微かな希望が一つ芽生える。パラグアイに残した財産、主として土地の取り戻しの可能性である。⁽³⁾ というのは、話しは少々さかのぼる。三国同盟戦争の最中、ブラジル艦隊がアスンシオンに攻めた時、リンチ夫人も市民とともに、脱出するが、その直前、夫人はアスンシオン在住のフランス人弁護士デ・エッサール

(Edmond Berthon des Essart) に代理権を付与し、購入していた土地の権利書を預ける。⁽⁴⁾ 夫人が戦争中、いろいろの理由、事情から土地を相当に購入していたことは前述している。この書類を使って所有権を主張することに、夫人は一縷の望みをもっていた。しかし、スチュアートとの訴訟の最中、デ・エツサール弁護士殺害の知らせが届く。多くの書類がその際、持ち出される。ところが、夫人にとり幸いにも、アスンシオンのフランス領事が、略奪、散逸を防ぎ、書類を領事館に引き取り、フランスに送付する。この連絡を受け、一九七四年の初め、リンチ夫人はパリを訪れ、必要とする書類を入手する。そうしているところ、パラグアイの新大統領ヒル (Juan Bautista Gill) (七四年六月就任) から招待の趣旨の書簡を受取る。その頃、大統領も絶えず変っている。ヒル大統領の「招待」の意図は明確ではない。良く見れば、贖罪に近い気持ちからか、悪く取れば、脅迫し、あるいは逮捕し関係書類を取り上げ、紛争に終止符を打つためだったのかも知れない。ロペス家、リンチ夫人名義の土地は収用され、多くの公有地とともに、民間に廉価で払い下げられていたからである。ブエノスアイレスにおける世論は後者であった。⁽⁵⁾

一八七五年六月一七日の週、リンチ夫人は、一七歳のエンリーケを同伴、リオデジャネイロに到着する。記録はないが、フェデリーコとカルロスも一緒だったと思われる。そして、一ヶ月後、ブエノスアイレスに到着。夫人は再び時の人になる。忘れられていなかった。偉大な南米の英雄の未亡人として迎える声とさらに訴訟を提起するために帰国したのか、と見る人たちもいた。ブエノスアイレスでは、弁護士が夫人に群がる。夫人を種に一稼ぎしようとする弁護士たちであった。夫人は、ブエノスアイレスでアルゼンチン政府を相手に訴訟を起こす。アスンシオン時代の家具調度が連邦政府の庁舎(大統領官邸?) で使用されていたからである。しかし、その回収を求める訴訟は上手く行かなかつた。このことが、夫人にアスンシオン再訪を決意させる切掛けとなる。一〇月一六日、ヒル大統領の善意、好意を信頼して、リンチ夫人はエンリーケとアスンシオンに向かった。途中、河を下るイギリス公

使と遭遇し、現地に派遣されているイギリスの軍艦の艦長宛の紹介状を貰う。一週間の船旅の後、一〇月二四日、二人はアスンシオンに上陸する。波止場、市場の人たちは、リンチ夫人と分かると、集まり、挨拶し、多くの人から握手、抱擁で、歓迎される。夫人は、旧友で、ヨーロッパで一時期行動をともにしたディアス夫人を訪ね、少憩する。リンチ夫人は、慎重に、上陸直前、イギリス艦の艦長に、緊急の場合の保護をお願いしていた。大統領官邸に訪問予定を連絡する。ところが、意外にも、大統領から、次ぎの便船での退去を求められる。夫人帰国を知ったアスンシオンの上層階層の女性たちが夫人退去を陳情したのである。その日の夜半、イギリスの艦長の護衛を受けて、夫人とエンリーケはイギリスの軍艦に乗り、ブエノスアイレスに帰る。そして、夫人は自己の立場を明らかにするため『異議申立て書』を執筆する。法に訴えて財産を回復する望みを断たれて、夫人はフランスに帰ることを決意する。そして、パラグアイの全財産をエンリーケに委譲し、偉大な英雄の子、その血統の承継者として、父のものであった財産の回復の戦いの継続を求めた。⁽⁶⁾ 帰仏にあたり、明文はないが、カルロスは兄と残ったようであるが、フェデリーコは、数年後母の死亡時にパリに居たから、母に同行したのだろうか。

ヨーロッパに帰ったリンチ夫人に訴訟が一つ待っていた。パラグアイ政府による、ソラーノのマテ茶販売の代理人であったクーリエ氏 (James Currie) に対する訴訟である。ソラーノに帰属する金銭があるとすれば、それはパラグアイ政府、国民に帰属する、という根拠であった。エンリーケから連絡を受けて、リンチ夫人は、ソラーノ故人の相続人であることを裁判所に届け出て、原告の一人になる。裁判所は夫人に好意的で、パラグアイ政府が訴えを取り下げると、被告が供託した保証金が夫人に交付される。⁽⁷⁾ もっとも、この訴訟で得た金銭は僅少で、訴訟の都度、費用ばかり高む。その上、フランスの敗戦の結果、フランスの銀行への預金は目減りする。夫人は訴訟を止める。そして、慎ましく生活することにし、住居も、それまでの Avenue Ulrich 一番地のマンションから Boulevard Perdre

五四番地のアパート（貸し部屋）に変える。新住居は、収入が限られている老女が入居している場所である。この転居は、生活の様式の変化も意味していた。夫人は子供たちから生活費の援助をうけることを拒否していたようである。プライドの問題である⁽⁸⁾。亡くなるまでの九年間の動静について記録はない。ただ、三年かけて、コンスタンチノーブル、聖地パレスチナへの巡礼の旅をしたようである。

一八八六年七月二五日、リンチ夫人は亡くなる。姿を見せないで、不審に思った隣人が警察に連絡し、二日前に亡くなっていることが分かる。臨終に立ち会った人もなく、孤独な死であった。パリに住んでいるフェデリーコに連絡する。彼は、数日おきに母親を訪問していたらしい。夫人の死因は胃ガンで、栄養障害もあつたらしい。胃の痛みのため、食事を取れなかつたのであろうか。死亡証明書には、氏名がフランシスコ・ソラーノ・ロペス未亡人、職業が金利生活者と記述された。そして近くの教会で葬儀が営まれ、ペール・ラシエーズ (Père Lachaise) 墓地⁽⁹⁾に葬られた。費用はフェデリーコが支払つた。その頃、フェデリーコはパリの電話会社で管理職の地位にあつた。長兄のエンリーケと弟のカルロスは、遠くアルゼンチンで遺産の取り戻し、そして、父母の名誉回復に奮闘中であつた⁽¹⁰⁾。一八八六年はわが国の明治一九年、アメリカでは、一〇月末、自由の女神が建立されており、翌八七年からパリではエッフェル塔の工事が始まっている。

リンチ夫人の生涯の記述をここで終えては、夫人が哀れである。その後の名誉回復を次に記述する。

(1) 訴訟に関して、リンチ夫人の評価の多くの記述は簡単である。左記が詳記する。

Brodsky, *op. cit.*, p. 245 et seq. も「とも」裁判所名、判決日が未記載である。

(2) 三〇詳しきを参照。

(3) Brodsky, *op. cit.*, p. 252 et seq.

- (4) Warren with the assistance of Warren, *Paraguay*, p. 235.
- (5) フラジルの圧力で、リンチ夫人を誘き寄せ、逮捕または殺害が計画されていたという説もある。Warren with the assistance of Warren, *Paraguay*, p. 238. なお、ロベス家支配の崩壊後に就任した、すくれて反ロベス派のリヴァローラが大統領はリンチ夫人の全財産の収用の政令を発している。Brodsky, *op. cit.*, p. 255 et seq.; Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, p. 174. ちなみに、政情の不安定は、その後も続き、一八七〇年から一九三三年の間、三頭政治一回、大統領二人が登場している。Pendle, *op. cit.*, p. 23.
- (6) Warren with the assistance of Warren, *Paraguay*, p. 237 et seq.; Brodsky *op. cit.*, p. 256 et seq.
- (7) Brodsky, *op. cit.*, p. 260.
- (8) Brodsky, *op. cit.*, p. 261.
- (9) この墓地には、ユーゴ、コントなど著名人が多く葬られており、観光名所になっている。『パリ(ミシユラン・グリーンガイド)』(2版)(一九九四年、実業乃日本社)一四二ページ以下。
- (10) Brodsky, *op. cit.*, p. 265 et seq. なお、エンリーケは、一八八一年商用でイギリスに出張したという。(Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, 174.) また、一八八五年にイギリスで結婚しており(後、離婚)、その妻の義理の娘が、母から聞いた「祖母の思い出」を執筆しているといふ。(Brodsky, *op. cit.*, p. 244.) 結婚の際、エンリーケは母と会う機会があったのだろうか。

一四 ソラーノとリンチ夫人の名誉回復

父ソラーノと母リンチ夫人名義の土地は広大であった。パラグアイのチャコ地方などの農地など、合計すると、二四〇万エーカーに近い。加えて、アスンシオン市内などの宅地、住宅もあった。しかし、一八七〇年三月一九日付け政令により、これらの不動産はすべて政府の管理下に置かれていた。夫人はこれらの土地の取り戻しを半ば諦

め、その処分についての全権をエンリーケに委任した。

エンリーケは十分な活動資金がなく、人脈も乏しかったが、間もなく、ブエノスアイレス在住のパラグアイからの亡命者のグループと知り合う。その人たちは「パラグアイ委員会」という組織を作っていた。委員会の主要メンバーは、「ロペス」の名前の利用を考える。そして、ソラーノの財産の活用案を思いつく。パラグアイで眠っているソラーノの財産を引き当てに「債券」を発行し、ヨーロッパで売り出す計画である。一八八一年七月、エンリーケとカルロス兄弟を帯同して、委員会のゴドイ氏はイギリスに出立した。投資家グループはかなり食指を動かすが、投資の回収の可能性が疑われ、結局、この計画は成功しなかった。⁽¹⁾

ヨーロッパから帰ると、一八八三年、エンリーケはアスンシオンに赴き、カバジェロ大統領（任期一八八〇年から一八八六年）を訪ね、父母の財産の取り戻しに対する支援を懇請し、好意的な返事を受ける。大統領はリンチ夫人の古い知人であった。他の知人も好意的である。しかし、同時に、ソラーノおよびリンチ夫人に対する反感がまだ根強いことも忠告される。エンリーケは、母の努力で、イギリスで教育を受け、語学に秀で、その態度は紳士的で、会う人に好感を持たれた。⁽²⁾ 彼は、父母の財産の取り戻しと父母の名誉回復という、両面作戦を平行して進める。一八八五年、彼は、リンチ夫人に帰属する土地に抵当権などが設定されていないことを確認し、その土地をアルゼンチンの投資家（投機家？）グループに売却する。買主への名義変更の請求を契機に、法律論争が繰り広げられたが、一八八八年、アルゼンチンの最高裁判所の判決でこの取引が容認される。エンリーケは、続けて、土地の売却を進める。⁽³⁾

他方、父母の名誉回復は大事であった。その頃、父母について虚偽を取りこんだ、悪意、中傷に満ちた書物が多く出版され、流布していた。⁽⁴⁾ その中で、言わば敵地にただ一人で乗り込んだ形で、エンリーケは、ねばり強く、忍

耐を持って、誤解を解くべく努力する。彼がそういう努力を始めた頃、状況というか雰囲気が変化しつつあった。ソラーノの戦死後、パラグアイを支配した占領軍の乱暴狼藉、略奪、さらに、占領軍に協力した亡命者の兵、占領軍の下で成立した臨時政府の施策は不適切で、経済不安、生活の窮乏と重なって、国民に不満が鬱積させる。これが、パラグアイ国民の一種の愛国心を醸し出し、亡き独裁者に対する郷愁のような感情を生ぜしめる。こうした動きを背景に、ロペス支持者を中心にコロラド党が結成される。エンリーケはアスンシオンの新聞『ラ・パトゥリア』の経営、編集に携わり、父母に対する誤解を解く論陣を展開する。そして、コロラド党にも関与する。一八九七年、彼は初等教育の学監に就任すると、その地位を利用して、父母の名誉回復のための広報宣伝に努めたとも言われる。⁽⁵⁾その頃になると、それまで孤独に戦いを進めていた彼のまわりに、ロペス家の血縁者（例えば、ソラーノの妹の子）、本来は敵である、ソラーノの政敵の血縁者まで、集まる。一九〇一年の、コロラド党の勝利に終った内戦にも参加する。そういうこともあって、父ソラーノを顕彰する動き、行事がいくつか催されるが、父の名誉の完全な回復を見ることなく、エンリーケは一九一七年に亡くなる。⁽⁶⁾

ソラーノの名誉回復の趨勢に拍車をかけたのは、国防、そしてそのために愛国心を鼓吹する軍の動きであった。そして、その背景にあったのは、三国同盟戦争の悲惨さを知らない。一八七五年以降に誕生した若い世代の人たちの増加である。名誉回復の直接の切掛けとなったのは、一九二〇年代の中頃から始まった、隣国ボリビアとの国境をめぐる紛争である。一九三三年から三五年に両国は戦火を交える（チャコ戦争⁽⁷⁾）。この戦争に際しての大統領の軟弱な姿勢を批判して、一九三六年一月、フランコ將軍が武力で政権を奪取する。將軍は全体主義的国家の建設を標榜し、愛国心を鼓吹、そのため、国家に貢献した軍人の顕彰を推進する。その英雄の一人として、フランシスコ・ソラーノ・ロペスが取り上げられる。三月一日、ソラーノの戦死の六六周年に亡きソラーノの榮譽を讃える行事

を催すことを命ずる。さらに、ソラーノの記憶を抹殺する、すべての法令の無効も宣言する。そして、ソラーノの銅像を建立し、町名にソラーノの名前を復活させた。さらに、ソラーノが戦死したセーロ・コーラの古戦場から、リンチ夫人と子供たちの手で埋葬されたソラーノの遺骸を掘り返し、アスンシオンの国家英雄顕彰宮に安置したのである。こうして、ソラーノの名誉は回復され、その子孫はソラーノ・ロペス家として、パラグアイでは名門と遇されていると言われる。同国の駐日大使（一九九九年当時の）もその家系であった。⁸⁰

次にリンチ夫人の名誉回復である。⁸¹夫人の存在はヨーロッパではすっかり忘れられ、時折、卑俗な大衆向きの小説の題材にされるくらいであった。しかし、パラグアイでは、夫人から数えて第三世代、第四世代となっている夫人の血縁者が結束して、祖母、曾祖母、曾曾祖母の名誉回復を願っていた。これらの曾孫、曾曾孫にパラグアイの国連大使、前述の駐日大使、大学教授など、社会的に影響力のある人もいた。この人たちに、文学者のグループが加わる。文学者は、それまでのリンチ夫人に関する評伝が虚構であった、と言つ反省から、復権に回つたのである。しかし、神格化が目標ではなかった。もともと、作家のなかには、リンチ夫人をあまりにも持ち上げ、逆の意味で虚構を書き込み、血縁者のひんしゆくを買つようなものもいた。こうした動きのなかで、政府あるいは血縁者の依頼もないのに、リンチ夫人の遺骨（遺灰）がパリのペール・ラシェーズ墓地から持ち出され、ブエノスアイレスに運ばれる。¹⁰そして、一九六一年七月二五日、リンチ夫人の逝去七五周年、ソラーノの生誕一三五周年に当たる日、ストロクスネル大統領は、夫人の遺骨を迎える式典を、国家英雄顕彰宮で催した。しかし、夫人が正式の妻でないことを理由に、教会がソラーノの横に安置することに反対したため、式典後、さしあたり、遺骨（遺灰）は宮殿の隣の国防省の特別室に安置され、ラ・コレータの墓地に改めて埋葬された。幼くして亡くなったコリンヌ・アデライデ嬢の墓のすぐ傍であった。ただ、墓碑名には、エリーザ・アリア・リンチと記される。パリの墓地の墓碑銘

にあった「ロペス」が削除されていた。夫人はどう思っているだろうか。

- (1) Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, p. 174 et seq.
- (2) エンリーケの人となりについては、下記を参照されたい。
Centurión, *ob. cit.*, Tomo I, p. 558 y seqs.
- (3) Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, p. 176 et seq.
- (4) Brodsky, *op. cit.*, p. 315 et seq.
- (5) Warren with the assistance of Warren, *Rebirth*, p. 113.
- (6) ちなみに、弟のカルロスは兄と行動をとまらしていたが、世に出ることなく、一九二九年にアスンシオンで亡くなり、パリにいたフェデリコは、その後、アルゼンチンの電話事業の立ち上げに参加し、フエノスアイレスで亡くなっている(没年不詳)。Brodsky, *op. cit.*, p. 275 et seq.
- (7) チャコ戦争について、さしあたり、左記を参照されたい。
堀口九萬一『南米及び西班牙』(昭和八年、平凡社)五七ページ以下。
増田義郎編『ラテン・アメリカ史 Ⅱ』(二〇〇〇年、山川出版社)三四六ページ以下(松下洋執筆)
- (8) 田中裕一『南米のパラダイス パラグアイに住む』(一九九九年、アゴスト) 五七ページ。
- (9) Brodsky, *op. cit.*, p. 279 et seq.
- (10) 奇妙にも、この遺骨遺灰を収めた椀が密輸に悪用されるという事件が発覚している。Brodsky, *op. cit.*, p. 284 et seq.

Restos de Elisa Alicia Lynch. <http://www.ultimahora.com/Correo/26-02-2005/articulos/NR02.HTM>

一五 結び

以上、エリーザ・アリシア・リンチ夫人の生涯を素描した。アイルランドで生まれ、フランスで少女時代を過ごし、遠く、未知の南米パラグアイに渡り、一時、栄華を極めるが、「夫」の戦死後、子供を連れてヨーロッパに帰り、子供の教育に当たり、生活費捻出のため、訴訟に狂奔する。パラグアイに残した財産を取り戻すため、再度パラグアイに行くが、成功せず、学業を終えた子供に後事を託して、晩年はひっそり暮らし、孤独で亡くなる。

彼女の評価は多様である。⁽¹⁾ここでは立ち入らない。当時、南米で教育水準が高く、対外債務が皆無であったパラグアイは、⁽²⁾三国同盟戦争の敗戦の結果、弱小国に転落する。いずれにせよ、戦争開始という政策決定の誤りを、「夫」ソラーノに影響力のあつたりんチ夫人の責任であるとする批判は酷であろう。

ここで一人の女性としてリンチ夫人をとらえる場合の感想のみ記そう。私が驚嘆するのは、彼女の強靱さ、努力、実行力、「夫」と子供への愛である。目前で戦死した「夫」と長男を自らの手で土を掘り、埋葬するなど、「地獄」に立ち向かう姿は鬼神に近い。「夫」の家族、それに連なるパラグアイの上層階級の女性の冷遇に耐えながら、自己の啓発・向上への努力も類を見ない。ヨーロッパに帰国直後、末子が亡くなり、半年間に肉親を三人失う。その不幸、悲しみにもめげず、間を置くことなく、残された子供の教育費用捻出のため、訴訟に取りかかる実行力も並の女性にはない。正式に結婚できなかったにもかかわらず、激戦地に赴き、最後まで「夫」と行動をともしたことは、愛情の一つの表現であろう。ところが、その「夫」は彼女を裏切り続け、他の女性との間に子をなしているが、「夫」の戦死後、その子を引き取り、ヨーロッパに同伴し、養育を試みている。その寛大さというか、心の広さも特筆すべきであろう。彼女とソラーノの関係は、正式の婚姻ではなく、言い方を変えれば、「コモン・ロー・

マリッジである。しかし、当時の道徳感から見れば、不倫関係の継続である。このことは、おそらく、彼女の心に罪を意識させていたかも知れない。そして、訴訟が示すような財産に対する執着は、幼少時代の飢餓、貧窮への恐怖によるトラウマが原因であったのかも知れない。しかし、晩年の聖地への巡礼の旅が象徴するように、贖罪を意識していたかのように思える。そして、成人した子供たちからの支援を拒否した態度は、彼女の強さが頑固というか片意地となっていたことを示すもので、両者が合わさって、孤独な生活、死となったのだろうか。ともあれ、これは一人の女性の生涯の物語である。

(1) リンチ夫人をアイルランドの人々は郷里の生んだ偉人のように見ている。インターネットで読んだ左記を参照されたい。なお、それらのホームページにはリンチ夫人の写真が掲載されており、閲覧できる。若い時代のもおよび晩年のものもある。

(<http://www.irlandeses.org>

<http://www.irishargentine.org/beautybeast.htm>

(2) 当時、多くの点でパラグアイはアルゼンチンを圧倒していたことを左記は指摘する。

Juan, Carlos Christensen, *Historia Argentina sin Mitos de Colón a Perón*, 1990, Buenos Aires (Grupo Editor Lat Inoameri-cano), p. 520.